輝く花

ジニー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
輝く花

【Ｎコード】
Ｎ３３４５Ｗ

【作者名】
ジニー

【あらすじ】
オリキャラ目線の物語です。時々違うキャラクターのもありま～す！
原作ほど奇怪な事件は全然ありません！
魔法＆友情＆ラブコメみたいな？
”闇再び”や”ジェームズポッターと隠れた罠”、”スコーピウスの日記”と出てくる登場人物が同じです。
内容も同じような感じかな？

～あらすじ？的なもの～

主人公は両親を亡くした日本人とイギリス人のハーフ、テレサ。

愛知県の孤児院で暮らしてたけど、１１歳の７月、ホグワーツからの手紙が届いた！

孤児院にはハグリットが迎えに来たり、ホグワーツ特急の中でアルバスやローズたちとも友達になって…

そんなこんなで進んでいく、アルバス・ポッター時代の二次創作です！

是非、読んでください！

感想待ってます♪

プロローグ

いつもと変わらない、忙しい毎日。

それが成人になるまで変わらないと思っていた。

わたしと同じ境遇の幼い子どもたち相手に遊んであげたり、洗濯物を洗い、ご飯を作り、赤ちゃんの世話をし……

小学校に上がってからずっと続けてきた孤児院での生活。

両親が交通事故で死んでからずっと住んできた孤児院。

それを離れて暮らすなんて夢にも思わなかった。

幸せだった両親との生活が壊れ、一気に地獄へ落ちたわたしを救ってくれた孤児院。

先生たちも優しくしてくれた。

だから、色々働いてもとっても楽しかった。

でも……それよりももっともっと楽しい暮らしがあるなんて。

たくさんの冒険と、楽しく面白い友達と毎日毎日話しながら過ごせるなんて。

今まで過ごしてきた単調な毎日を抜け出し、不思議で奇抜な毎日に変わるなんて。

物語は１１歳の夏。

あの不思議な郵便が来てから始まる・・・・・・・・

登場人物紹介（オリキャラのみ）

テレサ・シュレシンジャー

寮：グリフィンドール
杖：不死鳥の尾羽　サンザシ　２８ｃｍ　良くしなる
目の色：茶色
髪の色：こげ茶
ペット：白フクロウ　（アメリア）
性格：誰にでも優しいが、引っ込み思案。心配性で読書好き。時々大胆に。好きなことになると興奮する。

父はイギリス人でホグワーツ卒、母は日本人でボーバトン卒。
家族で交通事故に会い、奇跡的にテレサだけ生き残った。

如月カレン

寮：レイブンクロー
ペット：猫２匹　サン・ルナ
杖：ドラゴンの心臓の琴線　柳　２６ｃｍ　丈夫
性格：サッパリした性格。大雑把だが器用。頭がよく、運動神経も良い。
目の色：青緑色
髪の色：漆黒

父が日本人で魔法使い。母がイギリス人でマグル。
孤児院に居たが、１年ほどで引き取られた。
テレサとは孤児院のときに同じ部屋で仲良くしていた。
テレサより２年年下。

ドーセット・スリザリン

目の色：リンドウ色
髪の色：真っ黒
性格：明るい・うるさい・おしゃべり・ジョーク好き・怒りっぽい
ペット：黒猫　リングテール
杖：不死鳥の尾羽　カエデ　３２ｃｍ
寮：レイブンクロー

スコーピウスに惚れてる

クライド・スリザリン

目の色：焦げ茶色
髪の色：真っ黒
性格：静かだけど勇敢、考えるより先に行動するタイプ
杖：ドラゴンの心臓の琴線　カシ　２３ｃｍ
寮：グリフィンドール
ペット：アロウ　バーンフクロウ

恋愛には今のところ興味なし

ドーセットとクライドは双子、ドーセットが姉でクライドが弟。２人の母親は蛇にかまれ、死亡。父親は双子をイギリス人でありながら、モン・サン・ミッシェルに連れて行き、父親は神父となった。父親であるエドウィングは双子をマグルとして育て、２人にはスリザリンが誰かなどのことは話さなかった。しかし、父親は死に、双子は１１歳となりホグワーツへ行った。

アイリス・ライト

目の色：明るい青
髪の毛の色：白っぽい金髪
性格：何でも物事をはっきりと言う性格。喜怒哀楽が激しく、涙もろい。
杖：ユニコーンの尾の毛　楓　２５ｃｍ
寮：グリフィンドール
ペット：豆ふくろう　シリウス
本が大好き。好きな科目は呪文学

キャサリン・ハーコート

杖：ユニコーンの尾の毛　柊　３１ｃｍ
ペット：白猫　エリザベス　毛はつやつやしていて長い。
寮：グリフィンドール

目の色：うす茶色
性格：優しく、いざという時いい案を出してくれる。
髪の色：こげ茶

ゲラート・カーター

寮：ハッフルパフ
杖：ユニコーンのたてがみの毛　椿　３０ｃｍ
ペット：三毛猫　メーン
目の色：濃い青
髪の色：漆黒
性格：物静か・頭がいい

リサ・ウッドバーン

寮：レイブンクロー
ペット：メンフクロウ　グレース
杖：ユニコーンの鬣の毛　くるみ　２６ｃｍ
目の色：茶色
髪の色：栗毛
性格：おっとりしている。頭がいい

フレッドリカ・ニコライ

寮：ハッフルパフ
杖：ドラゴンの心臓の琴線　銀杏　３０ｃｍ　頑固
髪の色：金髪
目の色：灰色
性格：自己中心的
スコーピウスが好きで、ドーセットを目の敵にしている。

ロデリオ・クレメンズ

寮：スリザリン
杖：ユニコーンの尾の毛　楠　３２ｃｍ
髪の色：黒
目の色：黒
性格：意地悪
ドーセットが好き。

ロウァン・クリービー

寮：グリフィンドール
杖：不死鳥の尾羽　松　２５ｃｍ
髪の色：プラチナブロンド
目の色：灰色
性格：悪戯が意外と好き

（クリービーの子供だが、名前はわたしたちで考えました）

ヘニリー・クアグマイアー

寮：レイブンクロー
杖：ユニコーンの鬣の毛　柿　２９ｃｍ
髪の色：こげ茶
目の色：茶色
性格：物静か

登場人物紹介（オリキャラのみ）（後書き）

これから色々と増えていくと思います。

手紙

わたし、テレサ・シュレシンジャー１１歳。

愛知県の農村の小さい小学校に通ってます。

そこでは末田テレサって通してるんだけどね。

８歳の時に、イギリスで両親亡くしちゃってココの孤児院で住んでるんだ。

だから英語も意外と話せる。

孤児院ではご飯を作ったりと家事をしてるけどツラいと思ったことは無い。

先生もとっても優しいし、子どもたちも可愛いから毎日飽きないもの。

お父さんとお母さんと一緒に暮らしてた時には敵わないけど楽しく過ごしてる。

いつも一番先に起きるのはわたし。

パッと着替えて、みんなの朝ごはんの準備。

毎日、前の日に先生たちに言われたご飯を作る。

今日はお味噌汁にお米、サケに、ちょっとしたサラダ。

「おはよーございます…」

「おはよう」

だんだんみんなが起きだしてくる。

カタン……

いっつも朝ごはんを作っているときになる音。

郵便屋さんがポストに手紙を入れる時に鳴る。

わたし宛てには、カレンからの手紙くらいしか来ないけど…

カレンっていうのはわたしがココに来てから1年だけ一緒に住んでいた、わたしの親友。

2年年下だけどね

今日は誰に来てるかなぁ

郵便受けを開け、中に入った手紙を取り出す。

ンと…草太くんと若葉ちゃん宛てに、蘭先生、かすみ先生、あかりお姉さん…最後は…あれ？わたし？

英語で書いてあるけど、そこにはちゃんとＴｅｒｅｓａ　Ｓｃｈｌ

ｅｓｉｎｇｅｒと書いてある。

誰だろう?外国に知り合いなんて居ないのに…

ひっくり返してみると、ロウで糊付けしてあり、その上にライオン・鷲・穴熊・蛇が書かれている紋章が描かれていた。

そこにはＨｏｇｗａｒｔｓと文字が入っている。

ホグワーツ?なんの名前だろ…

開けると、分厚い手紙が出てくる。

「え?Ｈｏｇｗａｒｔｓ　Ｓｃｈｏｏｌ　ｏｆ　Ｗｉｔｃｈｃｒａｆｔ　ａｎｄ　Ｗｉｚａｒｄｒｙ??ま、魔法!?どういうことっ!?」

魔法!?

そんなのおとぎ話の中にしかないはず。

”ナルニア国物語”とか…

と、とにかくこれは何かの間違いだ・・きっと、そうだよ!

誰かがふざけて送ったんだわ。

……これ、どうしよう?一応取っておこっかな…

「テレサちゃん？どうしたの？」

向こうからみんなの声が聞こえてきた。

ああっ！ごはん！忘れてたぁ…

「今、行きますっ！！」

大男

それから数日後……

いつものように学校へ行き、家事をして、遊んで…

手紙は引き出しの奥に仕舞われ、ほとんど忘れかけてた。

そんな時……

ドンドンドン！ドンドンドン！！

普通のノックよりはほど遠い、とてつもなく大きいノックが聞こえた。

「「「！？！？！？！？！？」」」

中にいた全員が驚く。

「な、何・・・？」

わたしがみんなの気持ちを代表して声に出す。

「テ、テレサちゃん…お願い！」

あかねちゃんが瞳をうるうるさせながらしがみついてくる。

恐る恐るドアを開けてみる。

すると…

「……！」

目の前には空を見上げるようにしないと顔が見えないほどの大男が立っていた。

「あ…あ…あ…」

言葉にならない声が出る。

大男がわたしをジッと見て英語で話し出す。

「ン…テレサ・シュレッジャーちゅうのはココに居るか？」

ええっ！？わ、わたしぃ？

「えと…んと…あ、はぃ…わたしですけど…」

「んにゃ・・んじゃ上がらせてもらうな・・・」

大男がわたしを押しのけてズカズカ入っていく。

んもう・・ホントなんなのよ～！

大男（後書き）

ハグリットの言葉遣いが分からん・・・

魔法

あーあ、みんな怯えちゃってるよ・・・

『ホラお前さんも・・・』

手をクイッと動かしわたしを呼ぶ。

・・・・・・・・・・。

ちょこんと隣に座るわたし。

『この前来た手紙はもう読んだんか？』

『い、いぇ・・・まだ、ですけど・・・』

『アレにはなぁ・・』

いきなり、ホグワーツとかいう学校の話を始める。

あとわたしのお父さんが魔法使いだった、とかわたしは魔女だ、とか９月１日から新学期だから。とか・・・

いきなりそんな言われても分かんない・・・

『わ、わたしが魔女・・・？』

『そうだ・・・じゃなきゃあの手紙なんぞここに来るわけ無いからなぁ』

『は、はぁ・・・そ、そういえば貴方の名前・・・』

『ん?言ってなかったな、そういや・・・俺はハグリットだ。ホグワーツの鍵の番人と魔法生物学の先生をしちょる・・・この言葉前にも言ったような気がすんな・・・』

『そ、それでハグリット・・・さん?』

『ハグリット、でいいわい』

『それじゃ、ハグリット・・・わたしは9月から違う学校に行くってことなの?』

『そーゆうこっちゃ。まぁお前さんが行きたくなかったら別の話しだが・・・』

どうしよう?

ここの生活も楽しいけど・・・

新しいとこに行くって言うのも、結構いいなぁ

「ね、ねぇテレサちゃん?この男(ヒト)は何なの?」

あ、忘れてた・・・

このこと言ったら、わたし嫌われちゃうかな?

でも・・・

「あのね、わたし・・・」

言われたことを日本語で説明する。

「・・・へえ！テレサちゃん、行ってきなよ！」

「え？」

「すごいねぇテレサお姉ちゃん！」

「うんうん！魔法だって～いいなあ」

予想外の反応。

「ホントに！？」

「うん！すごいよ～！―ココ（孤児院）からそんな人が出るなんて・・ここの誇りだわ！」

ちょっと大袈裟のような気もするが、ここまで賛成してもらえると決心もつきやすいな。

『ハグリット！わたし、行くよ！』

『オ・・ハリーの時よりは早いのォ・・・』

『ハリー？誰？』

『いつか分かる・・・どっかで絶対目にするからなぁ』

『ふぅん・・・それで、わたしどうすればいいの？』

『んー、明日っからダイアゴン横丁っつうとこに行って準備するか』

『買い物するの？わたし、お金持ってないよ？』

『お前さんのお父さんとお母さんも魔法使いと魔女だ。グリンゴッツにゃあるだろ』

『ホント？なら、良かったぁ』

楽しいことが始まりそう！

夢？ホント？

次の日・・・・・・

スッと重い瞼が開く。

時計を見ると６時３０分を指している。

「・・・・・・・・・・・・・。」

いつもと全く変わらない光景。

――――――あれは・・・夢？

あまり回らない頭にこの言葉がグルグル回る。

いつもの癖でサッと着替える。

ふわ～っと欠伸をしながら下に降りていく。

やっぱりアレ、夢だったんだ・・・

キッチン、玄関、食堂、ソファー・・・いつもと変わらな・・・い！？

ソファーに緑色の大きな塊が動いている。

「・・・ハグリット！？」

夢だと思った出来事の中で知った名前を呟く。

ホントに・・・ホント？

本当だったんだ！！

だんだんと顔に熱が帯びてくる。

頭をブルブル振り、目をパチパチさせ、さらに擦ってみる。

それでも、ハグリットは目の前から居なくならない。

そして、頬を抓る。

「痛っ・・・」

やっぱり・・やっぱり、夢じゃない！

どんどん顔がニヤけてくる。

良かったっ！！

夢？ホント？（後書き）

短い・・・

朝食

「♪～♪～♪～♪～」

鼻歌を歌いながら朝食を作っていると、みんながちらほらと起きてくる。

「おはよ～・・テレサお姉ちゃん・・・」

「おはよっ！！」

「おはよう・・テレサちゃん・・・」

「おはよーございますっ！！」

皆がクスクス笑いながらこっちを見る。

「？」

「テレサちゃん・・・テンション高いね～」

「え？そーかなぁ！！」

ま、自分でもそう思ってるけど・・・

そうこうしている内にモソモソとハグリットが起きてきた。

『ンにゃ、テレサ早いなぁ』

『おはようっハグリット！』

『ん・・・』

『ホラ、ハグリットもご飯一緒に食べようよ！ちゃんと作ったんだからね！！』

『ホォ、ありがとなぁ』

ノロノロと動きながらも椅子にドカンと座る。

皆でパンと手を合わせ、（ハグリットはバン！だったけど・・・）食べ始める。

「いっただきま～す！」

今日はトーストとスクランブルエッグ、スープ。

みんながそれぞれ好きなものを食べる。

わたしとハグリットはトーストから。

パクッ　　バクッ

うわぁ・・・ハグリット、口デカッ！

1回で半分くらい食べちゃったんじゃない？

すっごぉい・・・

わたしがポカンと見ている間に全部食べ終わっちゃう。

周りの皆もあんぐりとしている。

皆の視線に気付いたハグリット。

『ン？』と言いながら、こっちを見て次にわたしたちの手元を見る。

『食べるの遅いのォ・・・そういやぁハリーたちも遅かったなぁ、何でか？』

・・・はぃ？貴方が早いだけだと・・・

『ハグリットさんが早いだけですよー』

蘭先生がクスクス笑いながら言う。

『そうですよ、とっても早いですね～』

かすみ先生もニコニコ笑う。

勿論この2人は大人なので英語は喋れるんだ。

こうして、楽しい朝食の時間が過ぎていった・・・・・・

朝食（後書き）

こんにちは☆ハリーです♪

みなさん、お分かりの人は居ると思いますが・・・

蘭先生たちのお名前、名探偵コナン&らんま1／2&全開ガールから来ておりますw

ホントは犬夜叉も入れたかったんだけど・・・名前が全員珍しいからねぇ

蘭先生・・・名探偵コナン　毛利蘭
かすみ先生・・・らんま1／2　天道かすみ
あかねちゃん・・・らんま1／2　天道あかね
草太くん・・・全開ガール　山田草太
若葉ちゃん・・・全開ガール　鮎川若葉

蘭先生はぁ彼氏居る設定w勿論、新一ぃ！

で、なびきも一応居るよ～
出てないけどね・・・
あかねちゃんは小学5年生で、乱馬くんは学校のクラスメイト設定！
良牙くんも居るw

そーいや、犬夜叉にも草太くん居たな～かごめの弟w

んまぁ、めっちゃ適当な名前の付け方です！

では☆

行ってきます

『ねぇハグリット・・・』

ずーっと気になっていたことを聞いてみた。

『ダイアゴン横丁・・・だっけ?そこってロンドンなんでしょ?どうやって行くの?』

そう、今日行くって言われたけど、わたしパスポート持ってないしお金もないし。

『そりゃ、アレだアレ・・・』

ハグリットが指したのは・・・雑巾!?それもボロボロの・・・

『ぞ、雑巾!?』

『アレになぁ魔法かけて、移動(ポート)キーっつうのにしたんだ』

『は、はぁ・・・』

『1回触りゃあ、どっかに飛んで行っちまう。』

『すごいねぇ・・・でも、あれ今までにたっくさん使ったよ?』

『昨日細工したばっかだかんな』

『じゃ、じゃあ他の誰かが触っちゃっても大丈夫？』

『ホントに？』

『あぁ』

『ホントのホントに？』

『あぁ』

『ホントのホントのホントに？』

『・・・あぁ』

良かったぁ～

何か変な目で見られてるけど、まぁいいや！

『もうすぐ出発だ。』

『分かった！！』

もうすぐかぁ～楽しみ！

ここの皆とは永遠の別れじゃなくて１年に１回は会えるんだもんね。

上に上がって蘭先生に借りたトランクを引きづりおろす。

うへ～っ重っ・・・

ウンウン言いながら降りてきたら、あかねちゃんが駆け寄ってきた。

「ね、写真・・・撮ろうよっ！！」

キラキラの目でお願いされる。

「うんっ！」

わたしが真ん中に立ち、周りに皆が立つ。

「ハイッ、チーズ！！」

パシャッ

一瞬白い光に包まれる。

「ふぅ～・・・」

一瞬の緊張感から開放される。

「うわぁよく撮れてる！」

真っ先に駆け寄ったあかねちゃんが嬉しそうに声を上げる。

「ホントだ！・・・テレサちゃん、この写真送るね！」

「ホント！ありがとっ」

みんな・・・優しいなぁ

「もうすぐ時間だ・・・」

「分かった！」

重いトランクを端から持ってくる。

「じゃあ、みんな・・・」

皆の顔を見渡し、ニコッと笑いながら・・・

「行ってきますっ！！」

「行ってらっしゃい！」

『テレサ、行くぞ・・・せーのっ！』

ハグリットの掛け声と共にボロ雑巾に触る。

その瞬間周りの景色が消え始める。

みんなが手を振ったのが見えた。

行ってきます（後書き）

いえい☆ハリーです！

次、やっとダイアゴン横丁・・・・

早くホグワーツに行きたい・・・・

ダイアゴン横丁

ドンという音と共に周りの景色が見え始める。

目の前には目立たない古そうな…バブ?だっけ?…がある。

「ハグリット…ここは?」

「漏れ鍋っちゅうとこだ。こっからダイアゴン横丁に行くんだ。」

「ふぅん…」

中に入り、奥まで進む。

そうしたら、レンガの壁に行きつく。

「…何にもないじゃん」

そう呟くとハグリットが、いつも持っている傘でトントンと叩きはじめた。

その途端レンガが動き出す。

そして、目の前にとっても賑わっている商店街?的なものが見えてきた。

「うわぁ…すっごい！！」

それから、手紙に入っていたリストを見ながらローブや大鍋、材料、杖、教科書など色々買い占めた。

勿論、グリンゴッツでお金を出した後だったけどね。

あのスッゴイ早いトロッコは怖かったぁ～…

あ゛、あのハグリットまで顔が青くなっちゃって…

今思い出すだけでも怖い…

杖はオリバンダーさんっていうところのお店で買った。

なんかね、不死鳥の尾羽にサンザシ、２８ｃｍよくしなる…だって。

この杖を持った時、指先がふわっと暖かくなって杖から花火が飛び出した。

とっても綺麗だったなぁ

あと、ペットも飼うことにしたんだ。

白フクロウのアメリア。

とっても毛がふさふさしていて、それはそれは可愛いの！

そんなこんなでどんどん日にちが過ぎて行った…

ダイアゴン横丁（後書き）

次からどんどんグダグダになっていきま～す☆
（予告ｗ）

キングズ・クロス駅

そして待ちに待った９月１日……

ガラガラガラガラガラ…

わたしが押しているカートが大きな音を立てる。

あぁ～重っ…

現在時刻は１０：３０。

出発時刻が１１：００だから十分間に合うと思うんだけど…

場所が、分かんない……

だって、９と３／４番線だよ！？

９はともかく３／４って……

ハグリットは先に行くとか言って居ないし…

どうしようっ…

9と10の間でうろちょろしていると、男女2人組に声を掛けられた。

「もしかして、ホグワーツ?」

「え?…あ、はぃ…」

「そうなの!あのね私たちもなの。私、ドーセット。こっちはクライド。よろしくね!」

「わ、わたしテレサ。よろしくお願いします…」

「固くならなくていいの!テレサ、1年生でしょ?私たちもそうだから!」

「う、うん…」

「姉ちゃん興奮しすぎ…」

クライドが困ったようにドーセットを睨みながら言う。

「はいはい…ホラ、早く行こうよ!」

「で、でも行き方分からなくて…」

「あ、分かんないの？あのね、９と１０の間にある壁に向かって走ればいいんだって。魔法使いなら通り抜けられるんだよ！」

うっそぉ…

「じゃ、クライドが１番ね！頑張って～♪」

はぁ…と溜息をつきながら呆れたようにクライドが言う。

「姉ちゃん、テンション高いぞ。」

「いいじゃんいいじゃん！ホラ、早く行きなさいよ」

「分かったよ」

そういうと、恐れた様子でもなく壁に向かって突っ走り始めた。

ぶつかる…と思った瞬間クライドの姿がヒュッと吸い込まれる。

「わお！すごい！！」

ドーセットが目を輝かせながら言う。

「次はテレサ行っていいよ！」

「わ、分かった…」

カートの握るところをギュッと握りしめる。

テレサ！覚悟を決めなきゃダメよ！

…よしっ

タンタンタンと壁に向かって走る。

もう後戻りはできない。

どんどん壁が近づいてくる。

ぶつかるっ！目を瞑る。

…衝撃が、ない？

目を恐る恐る開けると、目の前には紅色の汽車が悠然と止まっている。

本当に通り抜けたんだ。

「ふへ～っ怖かったぁ」

すぐ後からきたドーセットがニコニコしながら言う。

その時。

「ドーセット！クライド！！」

2人を呼ぶ声がした。

「あ、アルバスたちだわ。」

「テレサ、向こうで会おうな！」

手を振り振り呼ばれた方に去っていく。

あぁ良かった！

学校にもついてないのに友達が出来ちゃった。

時計を見ると出発まで１５分。

あ、汽車にこの荷物乗っけなきゃ。

カートを押しながら、汽車に近づく。

キングズ・クロス駅（後書き）

ホントは1章で済ますハズだったんですけど…

重いっ

何て重いの、コレ…

色々と入っているトランク。

持ってきたのもカートに入れたのもハグリット。

うわ…どーしよぉ

本日2回目の”どーしよう”

うんうん唸りながらトランクを持ち上げようとしてると、年上の男の子が声を掛けてくれた。

「君、大丈夫かい?」

「あ…」

「すっごい重そうだなぁやったげるよ」

「え、あ、ありがとうございます…」

わたしが悪戦苦闘していたトランクをギュッと持ち上げ汽車の中に入れてくれる。

「ありがとう…」

「これっくらい軽いもんだぜ」

なんか楽しそうな人だなぁ優しいし…

「僕、ジェームズ・ポッター。君は?」

「テレサ・シュレシンジャーです。」

「へえ~テレサね。よろしく!…テレサ新入生だろ?僕の弟も今年1年なんだ。コンパートメント来る?」

「いいんですか?」

「勿論!たくさん居るけど大丈夫だよね?…あと、敬語は要らないからさ」

「は、はぃ…じゃなくて、うん?」

「OKOK!」

ポ~~~ポ~~~~

汽車の汽笛が鳴り響く。

ドアがガタンと閉まり、ゆっくりと走り出す。

外から別れを惜しむ親たちの声が聞こえる。

「んじゃ、行くぞ」

ジャームズが歩き出す。

そのあとをチョコチョコと着いていく。

うわあ、すっごいなぁ…

日本じゃこんなの無かったもん。

へえ～

キョロキョロ周りを見ながら歩いていると、ジェームズの弟が居るっていうコンパートメントに着いたみたい。

「ここなんだけど、丁度カートが来てるから待っといて。」

「うん。」

『お菓子いらないかい？』

『チョコレートフロッグ３１コちょーだい！！』

『何故に３１コなの？』

『１日に１個食べるために決まってるじゃないか！』

『……ねぇ、９月って３０日しかないと思うけど？』

『…ガーン！』

『プラス、カビると思うよ』

『……ガーン！！』

面白い会話が聞こえる。

クスクス笑っていると、ジェームズが呆れたように言う。

「”ガーン”のヤツが僕の弟さ。アイツ、馬鹿だから」

はぁと溜息をつき、ドアに寄りかかりカッコつけながら話すジェームズ。

「アルももう少し頭を使えたらな…フッ」

「あ、ジェームズ！」

「…アレ？後ろの娘（コ）誰？」

「あ！テレサじゃない！」

口々に言われる中、名前を呼ばれる。

ドーセットとクライド！

「ジェームズと知り合い？」

「まぁ、さっき会ったんだ」

すると、中にいた女の子の1人がニヤッと笑いながら小指を立てる。

「もしかして…コレ？」

……はあっっっ！？

「ち、違うわよぉ！！」

「アレェ？思いっきり否定するところが怪しいなぁ」

「んもう！」

その間、中にいた男子4人とジェームズから1人を除いて”？”と言っている。

”？”が出ていないのはクライドだけ。

双子のお姉ちゃんが居たら、流石に知ってるわよねぇ

女子3人がわたしをからかいまくっていると、クライドがボソッと言った。

「…姉ちゃんこそ、スコーピウスに一目惚れしたくせに…」

「それは認めるわっ！」

「「「……」」」

沈黙に包まれるコンパートメント。

そんなにハッキリ言っちゃあ、ねぇ？

真っ赤になってるプラチナブロンドの子がスコーピウス、ね。

チョコを両手に抱えてるのがアルバスかな？

「…ね、ねぇ…みんなはどこの寮に入りたいの？」

さっき1番最初にわたしをからかい始めた女の子が聞いた。

「私はレイブンクローかハッフルパフかなぁ…でも、家系的にスリザリンに行っちゃうと思うけどね。そういうリサはどうなの？」

ふむ、あの子はリサね。OK。

「私は、うーん…私もレイブンクローかハッフルパフかなぁ？」

「僕はグリフィンドールだな、入りたいのはね。でも姉ちゃんと一緒でスリザリンだと思うな」

クライドも買ったお菓子を頬張りながら言う。

次に赤毛の女の子が言う。

「私は絶対グリフィンドール！」

「まぁローズはそうだと思うな、ウィーズリー家は皆グリフィンドールだし。」

赤毛の女の子はローズ。

「僕は、やっぱりレイブンクローに入りたいけどね…父さんは絶対にスリザリンだって言い張るしな」

スコーピウスも言う。

「アルは？」

「僕は…グリフィンドールがいいけど、スリザリンでもいいかなって思い始めてるところかな」

「！！」

みんなビックリしている。

「さっき、父さんに聞いたんだ。僕のミドルネーム”セブルス”っていうだろ？それ、スリザリン出身の校長先生から取ったんだって。でも、その人は父さんが知ってる中で1番勇気のある人間だったって…」

「…へえ～、すごい名前なのね」

しみじみとドーセットが言う。

「ま、とにかく僕はグリフィンドールかスリザリンだな」

「テレサは？」

クライドが話を振ってきた。

「わたし?…わたしは、グリフィンドールかな?やっぱり。性格的にはハッフルパフに行きそうなんだけど。…ジェームズはどこの寮なの?」

「僕とフレッドは、グリフィンドールさ!この中からも誰か来るだろうね」

そんな調子で時間が過ぎて行った…

ホグワーツ特急（後書き）

ひえ～！

次、事件発生ですｗ

事件発生！？

「着いたみたいよ」

リサが窓の外を見ながら言う。

ガタン

汽車が止まる。

皆が外へぞろぞろと出て行く。

外に出ると、ハグリット級に大っきな人が「イッチ年生！イッチ年生！！」と叫んでいる。

「俺たちはコッチだから、向こうで会おうな！」

フレッドがジェームズの腕を掴んで、去っていく。

辺りはもう真っ暗でとても寒い。

「寒いわねぇ…」

「そうね…」

腕を抑えながらドーセットが言う。

「こっからボートだ！８人ずつで乗っとくれ」

男子３人（アルバス、クライド、スコーピウス）と女子４人（ドーセット、ローズ、リサ、わたし）プラス男の子１人。

「ボートって初めて！修道院で育ったから乗ったことなんて無かったし…」

ドーセットが興奮したように言う。

「修道院で育ったんだ！・・・親はどうしたの？」

「……どっかでお星さまになってるわ…」

ドーセットもなんだ…

「…そっか、ゴメン」

「でも、わたしもそうだったよ」

慰めるように言う。

「え？テレサも？」

「うん。８歳の時に事故でね…一応わたしも巻き込まれたんだけど、お父さんとお母さんが魔法使って助けてくれたみたい…」

「そうなんだ…」

女子の雰囲気がくらーくなった所で、スコーピウスが唐突に言い始

める。

「今日さ、僕父さんと喧嘩したんだ。…〝父上〟と呼べ。だの純血以外とは仲良くするな。だのポッターたちには声を掛けるなとか…アルバスたち、いい友達なのにさ」

「純血？…何か関係あるの？」

リサが不思議そうに聞く。

「さあ？良く分かんないんだ。」

はぁ～とため息をつくスコーピウス。

「そう…貴方のお父様にも何か考えがあるのよ。彼が純血結婚を願うのならそうなるかもしれないわ。でも、貴方が自由な交流を願えばそんな未来になるかもしれない。この世界は全て神の意志で働いてるの。運命がどうなろうと、それをきちんと受け入れればいいのよ。」

ドーセットが優しく言う。

キリスト教を知らない人も癒された気持ちになる。

「ドーセット…君、とっても優しいんだな」

「そう？…ありがと」

「ええっ！？姉ちゃんが優しい？…そんなわけないじゃないか！」

クライドが雰囲気をぶち壊す。

「ちょっと、クライド！！」

「だって、なあ？」

「クライドっ！！」

姉弟喧嘩（きょうだい）が始まる。

そこへ、乗り合わせた男の子が声を掛けてきた。

「あのぅ…お取込み中悪いんだけど、もしかして、ポッターさんだったりする？」

「え？…そうだけど」

アルバスが答える。

「うわぁ！スッゴイ！…僕、ロウァン・クリービーと言います！」

「クリービー？もしかして、コリン・クリービーさんと関係があるの？」

お父さんから聞いたことある名前だったから。

友達だったんだって。

「うん。僕の伯父さんだよ、その人。あの戦いの時に死んじゃったんだけど…

あのさ！僕、父さんから聞いたんだけどさ、ここの湖落ちると大イカが助けてくれるんだってさ！すごくない？…やってみる？」

キランと男子の目が輝く。

…もしかして

「やりたいっ！！」

えええええ～～～！！！！！

「ちょっとぉ！」

「やめてよね！」

「私たちはイヤだよ！！」

「聞いてるの！？」

女子の講義も空しく、男子４人はボートを揺らしていく。

「ねえ！！！！！」

しかし、男子たちが聞いているわけもなく…

どんどんと揺れが大きくなる。

縁を掴んでないと飛ばされそうなくらい。

「ちょっと～～～！！！！！」

「そ～れ！」

誰かが掛け声を出す。

その瞬間揺れがいきなり大きくなった。

したがって、今まで精いっぱいだった力が限界に達し…

当然の如く、女子４人の身体はボートの外へ投げ出される。

「「「「きゃあああああああ！！！！」」」」

盛大な悲鳴が迸る。

バッシャーーーン！！

「ああっ！」

男子の１人が声を上げたのが聞こえた。

口の中に水が侵入してくる。

く、苦しいよぉ……

身体がどんどん沈んでいく。

……誰か、助けて…っ！

バシャン

男子４人が水の中に飛び込んだ。
スコーピウスはドーセットの方へ。
クライドがローズの方に。
助けに言ってる姿がうっすらと見える。
その時、両手を掴まれた。
アルバス！ロウェン！
身体が引き上げられ、顔が外に出る。
「ぷはぁっ！」
思いっきり息をする。
まだ心臓が波打っている。
…死ぬかと思った…
「ゴメンっ！」
「僕たち、全然考えてなかったよ」
２人が申し訳なさそうに謝る。
「ううん…大丈夫…ありがとね」

周りを見ると、ドーセットもローズも引き上げられている。

良かったぁ…って！

「リ、リサは！？」

「え？…ホントだ！居ない！！」

向こうの2組も気付いたようで、キョロキョロしている。

ゴゴゴゴゴゴゴゴ・・・

いきなり地響きが鳴り始める。

水が盛り上がり、大イカとリサが上がってくる。

ひえええっ！

「リサっ！！」

ローズが叫ぶ。

声が出ない。

…何かするっと思ったんだけど。

リサをボートに乗せて、帰っていった。

良かった～…

皆が助かって、ホッとした途端意識が薄れてきた。

「テレサ！？」

アルバスの呼ぶ声とロウァンの焦った顔で記憶は途絶えた。

事件後

「Ｍｒ．ポッター！貴方はお父様と同じです。ちゃんと周りのことも考えるように！
Ｍｒ．マルフォイ！貴方のお父様よりはましですが…人に迷惑をかけてはなりません！
Ｍｒ．クリービー！変なことを皆に吹き込まないでください！
Ｍｒ．スリザリン！周りの流れに乗って悪いことをしないように！」

女の先生の怒鳴り声で目が覚めた。

目をこすりこすり起き上がる。

「テレサ！」

「大丈夫??」

ドーセットたちが心配そうに駆け寄ってきた。

「あぁ、Ｍｓ．シュレシンジャー。大丈夫ですか?」

さっきまで怒鳴っていた先生が表情を和らげて優しそうに聞く。

「あ、はぃ…」

そう言いながら、男子たちの方に目を向けると４人はバツの悪そう

に顔を見合わせる。

「もうすぐ、組み分けが始まります。早くホールへ行きなさい。」

ぞろぞろと部屋から出る。

そういえば……服が乾いている。

あんなにビショ濡れになったのに…

聞いてみたら、あの先生が魔法で乾かしたんだって。

「ね、あの先生って誰？」

「ホグワーツの校長先生で、マクゴナガル先生っていうんだって。」

「へえ～……ね、ローズ」

「ん？なに？」

「あのさぁ…」

女子たちが談笑していると前で黙りこくっていた男子組が「あのぅ…」と気まずそうに声を掛けてきた。

「？？」

「その…ゴメン」

上目使いで謝る４人。

「ううん！全然大丈夫だから！」

ドーセットが明るく言う。

「そーね、ちょっと怖かったけど…」と、ローズ。

「スリル満点だったし！」と、リサ。

「今思い出すと意外と楽しかったかも。」と、わたし。

「それにこっちはお礼言わなきゃいけないくらいだし。」

「助けてくれたもの！」

「結構カッコ良かったわよ！」

「そうそう！ヒーローって感じだったぁ」

キャイキャイ言っていると、４人は救われたように笑った。

その笑顔につられて、わたしたちも笑顔になる。

「それより早く行かなきゃ」

８人で走り出す。

組み分け帽子

現在は組み分けの順番待ち中。

わたしはSだから最後の方なんだけど…

正直言って、もう緊張します…

この8人の中で1番最初はロウァン。

2番目はスコーピウスで、アルバス、わたし、ドーセット、クライド、ローズ、リサと続く。

「クリービ・ロウァン！」

ロウァンの名前が呼ばれた。

ロウァンがビクッと揺れ、おずおずと前に進む。

「……グリフィンドール！！」

30秒程沈黙した後、帽子が叫んだ。

グリフィンドールの席から割れるような拍手が聞こえる。

ロウァンが嬉しそうに走っていく。

「クレメンズ・ロデリオ！」

なんかスッゴイ威張ってそうな男の子が来た。

帽子を被って約1秒。

「スリザリン！！」

帽子が叫んだ。

…早すぎませんか？

「マルフォイ・スコーピウス！」

スコーピウスが帽子を被る。

……

たっぷり3分間。

「……レイブンクロー！！」

ええっ！？

ホールがざわめきに包まれる。

あ、のマルフォイがスリザリンじゃない寮（ところ）に入ったからだろう。

スコーピウス自身も驚いている。

すると、隣から拍手が聞こえた。ドーセットだった。

「スコーピウス！良かったわね！！」

それを見て、順番待ちに居る5人と―フレッド・ジェームズ・ロウァン《3人》も拍手を始める。

そんなわたしたちを見て、スコーピウスがフッと笑った。

「ニコライ・フレッドリカ！」

ニヤニヤ笑いの女の子。

なーんか、わたしは美しいのよ♪って感じの子。…苦手な感じの子だなぁ

被って10秒。

「ハッフルパフ！！」

帽子が叫ぶ。

そのフレッドリカって子が変な顔をしながら言った。

「レイブンクローが良かったわ…初めてよ、こんなこと…」

何が初めてなのかは分かんないけど、なんとなく予想がつく。
お嬢様らしい感じだしね。
やっぱり、苦手なタイプだわぁ…

「ポッター・アルバス！」
アルバスの番だ。
ゴクッと1回唾を飲み込み、前に向かうアルバス。
帽子を被る。
1分・・・2分・・・3分・・・4分
「…グリフィンドール！！」
ホッと安心したアルバスが席に走る。

「クアグマイアー・ヘニリー！」
前に出てきた男の子を見てクライドがアッ！と声を上げる。

「アイツ、あの事件の時にリサに手伸ばしたヤツだぜ」

「ふぅん…」

リサが驚いたように上へあがった男の子を見る。

「…レイブンクロー！！」

「シュレシンジャー・テレサ！」

わ、わたしだぁ…

選ばれなかったら…どうしよう？

そんな不安が今頃になって出てくる。

高ぶる心を押し付けて、帽子を被る。

『ふぅ～む…この子はどこへ入れようか…そうだな…』

「……グリフィンドール！！」

…やった！

入りたかった寮に入れた！

意気揚々と席に走る。
皆がニコニコと迎えてくれた。

「スリザリン・ドーセット！」

一瞬でホールがしーんと静まる。
その静けさも気にせず、毅然とした表情で壇上に上がるドーセット。
なんか、かっこいい…
帽子を被って約1分。

「…レイブンクロー！！」

スコーピウスの時と一緒でホール内がざわめきに包まれる。
そんな中、ドーセットはニコニコとレイブンクローへ向かう。

「スリザリン・クライド！」

ホール内がまたシーンと静まる。

（もう1人居るのかよ！）

が、みんなの心情だと思うよ

クライドもまた約１分。

「……グリフィンドール！！」

わたしたち１０人の拍手以外、何も聞こえない。

（レイブンクローはともかくスリザリンの宿敵のグリフィンドール！？）

ホール内の心情が統一されたであろう、瞬間。

「ウィーズリー・ローズ！」

ローズが上る。

被って１０秒。

「…グリフィンドール！！」

キラキラの笑顔でこっちに来るローズ。

「ローズ、良くやった！」

フレッドがニコニコしながら言う。

「ウッドバーン・リサ！」

帽子を被って、３０秒。

「レイブンクロー！！」

ニコニコと走るリサ。

「お～、レイブンクローとグリフィンドールに分かれたな。」

クライドが面白そうに言う。

そして最後の１人。

「ライト・アイリス！」

トタトタと上に上がり、帽子を被る。

約１分。

「…グリフィンドール！！」

アイリスがこっちに走ってくる。

マクゴナガル先生が出てきた。

「さあ、宴を始めましょう！」

状況説明（？）

9月1日から何週間も経ち、寮の同じ学年の友達とも仲良くなった。

メンバーはトマス・ボーンズ、ラベンダー・ガーゴイル、レイチェル・ゴーント、ダニエル・グラム、ジャニュミ・リングテイル、アイリス・ライト、アルバス・ポッター、ローズ・ウィーズリー、ロウァン・クリービー、クライド・スリザリン、そしてわたしテレサ・シュレッジャー。

みんな優しくて面白くてすっごい楽しいよ

特にアイリスはドーセットと親友なんだって！

だから、よく一緒に居るんだ。

そしてグリフィンドールに入ったわたしたち6人は仲がいいことで結構有名。

あと、レイブンクローの3人も。

先生の話だとあの3人組の人数が増えたバージョンみたいだ、とのこと。

あの3人組ってのは、教科書に載ってたハリー・ポッターさん、ロナルド・ウィーズリーさん、ハーマイオニー・グレンジャーさんだって。

すっごい有名なんだよ！魔法界を守ったとか何とか…

しかも、アルバスは名字の通りハリー・ポッターさんの息子だって。

で、ローズの両親がロナルド・ウィーズリーさんとハーマイオニー・グレンジャーさんなんだって！

あー、スゴいなぁ……

楽しかった授業は”闇の魔術に対する防衛術”と”呪文学”。

飛行訓練では、アルバスがめちゃくちゃ上手かった。

スコーピウスもまあまあだったんだけど、アルバス級はアルバスのお父さん以来なんだって。

あと、アメリアで孤児院のみんなと手紙交換もしたよ。

ハグリットはアルバスたちと知り合いだったから時々お茶したりしてるんだ。

ハグリットが時々言ってた”ハリー”ってハリー・ポッターさんだったんだなぁ

あ、そういえばジェームズと同じ学年の子にキャサリンっていう子が居て、すっごいしっかりしてて、ジェームズとフレッドの悪戯を止めてる女の子なんだ。

頭も良いし、憧れるなぁ

そしてスコーピウス。

元々両親と喧嘩中だったのに、レイブンクローに入っちゃったから冷戦状態だとか…

ドーセットとクライドは…

スリザリンって名字なのにレイブンクローとグリフィンドールに入ったから、すこ～し（？）小言を言われてたんだけど、

クライドは無視して、プラス苛められてた子を助けるという行動をしたからすぐに無くなったんけど…

ドーセットは長くて綺麗な黒髪に清楚な容姿で、女の子からの嫉妬がスゴいんだって。

それに、色々反応しちゃうから、まだ続いてるみたい。

だから毎回スコーピウスとリサが止めてるんだって。

そんなこんなで楽しくやってるんだ！

状況説明（？）（後書き）

はい、会話皆無！

あと、後でプロローグのあとに登場人物（オリキャラのみ）紹介書くつもりなので。

喧嘩!?

そして、現在…

授業が終わり、6人で話しながら歩いていると…

「スコーピウス?」

たった1人でとぼとぼと白い顔を更に白くした顔で歩いている。

「スコーピウス?どうしたんだ?」

アルバスが聞く。

「あ、アルバス…え、あ、いや…何でもない…」

明らかに何かありそうな顔で言う。

「そうかぁ?…ドーセットとリサは?」

スコーピウスがビクンと揺れる。

「……1人で散歩してるだけだから。」

…答えになってませんが?

「そーは見えないけど…」

「ホントに何でもないからッ！！…じゃな」

なんか最後、ヤケになって叫んで去っていった。

「……どうしたんだ？アイツ…」

「さあ？」

「誰が見てもあれはおかしかったよね」

「うん、同感」

「ドーセットたちと何かあったんじゃない？」

「ええ～まさかぁ」

「んま、アイツはアイツなりになんかあったんだろ。行こーぜ」

「ほーい！」

寮に向かって歩き出す。

曲がり角を曲がる。

ドンッ！！

誰かとぶつかった。

「…あっゴメンなさい！！…ってドーセット？」

「…テレサぁ…みんな…」

綺麗な瞳（め）に涙が溜まっていく。

「ド、ドーセット！？」

「うわぁ～～ん！！！！！！」

ドーセットが飛びついてくる。

「どうしたの！？」

大声で泣くドーセット。

みんなが困ったように顔を見合わせる。

広い廊下に、ドーセットの泣き声だけが木霊する。

何分か経ち、ドーセットが落ち着いてきた頃。

何で泣いていたのか、1人で歩いていたのか、理由(わけ)を聞いてみる。

「ね、どうしたの？」

俯きながらドーセットがポツリ、ポツリと話し始める。

「あのね…スコーピウスと喧嘩、したんだ…」

喧嘩の真相（前書き）

え～テレサたちにはドーセット視点で話してるので、最初テレサたちが聞いた話とコレはちょっと違います。

喧嘩の真相

「…あのね、スコーピウスと喧嘩、したの…」

衝撃の告白。

「ええっ！？」

「…だからアイツも…」

「私が…悪いの。…だって！」

時と場を変え、ここはレイブンクローとスリザリンの合同授業の後。

「やーい、スリザリン！！」

スリザリンの男子らがドーセットをからかう。

「♪狡猾さの欠片もないスリザリン♪」

「ギャハハハハハハハ！！」

変な歌まで作り始める。

女の子の気を引くためにやる、この年齢によくある行動であろう。

「あぁ！！鞄にスリザリン大好き！って書いてあるぞ！！」

「えぇっ！？」

今まで無視していたドーセットが驚きながら鞄を見る。

「ワハハハハハハハハハハハハハ！！」

お腹を抱えて笑う男子たち。

「＼＼＼＼＼＼＼＼＼＼＼＼＼＼＼＼＼＼＼＼＼＼」

顔を真っ赤にして剥れるドーセット。

「おい！やめろよ！」

スコーピウスが庇う。

「え？マルフォイ家の癖してレイブンクロー入ったヤツが何言ってるんだ？」

スリザリンの代表格、ロデリオが言う。

さっきまでニヤニヤしていた男子たちが一瞬でどす黒い（！？）顔

に変わる。

しかし、ドーセットがキッと睨みつけるとまたもやニヤ顔に戻る。

まだまだからかいは終わりそうにない。

ドーセットとリサはボーッとしながらそれを聞き流す。

「ハーイ、スコーピウス！」

フレッドリカが何故か入ってきた。

「ね、ドーセットなんかとじゃなくて私とご一緒しない？」

「…いい。」

「アラ、ドーセットのことなんて気遣わなくていいのよ。本当は私と一緒したいんでしょ？…やっぱりそうなのね！まぁそうでしょうね、ドーセットのあの髪！真っ黒なんて…まるで悪魔みたいだわぁ。私のこの綺麗な金髪のほうがよっぽどいいわ！ドーセットなんかと居ると、貴方まで印象悪くなるわよ！」

身をくねくねさせながら言うフレッドリカ。

（うへっ、気持ち悪ッ！！）

内心そう思いながら適当に対応するスコーピウス。

「で、でも僕は…ドーセットのこと好きだし…」

どんどんスコーピウスの頬が赤くなっていく。

すると、突然フレッドリカがスコーピウスの右手を掴み、両手で抱きしめた。

「はぁっ!?何すんだよ!」

その時、フッとドーセットがスコーピウスを見た。

目を見開く。

プチッという音がした。

「…リサ、帰るよ」

聞いたことのない低い声で言う。

リサの手首を強引に掴み、出て行く。

「あっ…ちょっ…待っ…」

スコーピウスが焦ったように言う。

クルッと振り向きスコーピウスを見据えるドーセット。

「アンタなんて大っ嫌いなんだから!!!…行くよ」

そう言い、早々と出て行く。

「ド、ドーセット!?」リサの声が聞こえる。

残ったのは呆然とした男子たちとニヤニヤ笑いのフレッドリカ。

「ホラ、ドーセットも貴方のこと好きじゃないって！」

ねッ！と自分だけで可愛いと思ってるらしい笑いかたで笑いかける。

スコーピウスはというと…フレッドリカのことをジッと睨みつけ、強引に手を振りほどく。

荷物を引っ掴み、押しのけて出て行く。

最後に残ったのは…

ポカンと口を開けたまま固まる男子たちとフレッドリカだけだった…

2人が…（前書き）

んと、アイリスとローズが壊れかけですw
あと、ドーセットのお話はぁちょい視線違うのでスコーピウスが悪者的になってます。その辺はご了承を。

～1人称～
テレサ：わたし
ドーセット：私
ローズ：わたし
アイリス：あたし
フレッドリカ：私
アルバス：僕
スコーピウス：僕
クライド：僕
ロウァン：ぼく
ジェームズ：僕
フレッド：俺
ロデリオ：俺・俺様
キャサリン：わたし

です。
なんかゴチャゴチャしてきたので書きました
でわ☆

2人が…

ドーセットの話が終わる。

「……なんか五分五分っぽい感じね」

「アイツがねぇ～…」

…なんかしっくり来ないなぁ

スコーピウスってそんな性格だったかな～

ドーセットの話だと、スコーピウスが他の女の子とイチャイチャしてたって感じだったけど…

でもなぁ、あのスコーピウスが……ないない。

「勘違いかもよ？」

「……でも…」

「だってさ！あのスコーピウスがさあ…ねえ？」

「うんうん」

「……そうかな」

「大丈夫だって！…スコーピウスも落ち込んでたもの」

「…ホント？」

「本当だぜ！…あの白い顔が青白くなってた」

「ホラ、部屋で落ち着けば気分も楽になるんじゃない？」

「…ありがと」

そう言い、ニコッと笑うドーセット。

良かったぁ…

皆で歩き出す。

そして、もう少しで寮に着く…というところ

「あーら、私の美貌には勝てないと思って泣いてきたのかしらん？」

……何、この人。なんか気持ち悪い

ドーセットの肩がビクッと揺れる。

「…邪魔です。退いて頂けますか」

アイリスが少し（！？）キツめに言う。

「ふぅん、アナタも私には勝てないと…」

「貴方、何言ってるの？」

「それじゃ、負けを認めてくれなーい？」

「何の勝負のですか」

「え、分かんないのぉ？」

「だって勝負してませんから」

「……ソコのアナタ。」

口では勝てないと思ったのか、通りすがりの男の子を呼ぶ。

「何？」

「これをお飲みになって？」

どこから持ってきたのか…紅茶を差し出す。

「は、はぁ…」

コクッと飲む男子学生。

飲み終わった途端、目が虚ろになる。

もしかして…真実薬？

…そんなものよく持ってたわね…

「ねぇ、私とこっちの女どっちが可愛い？」

…うわぁ…根っから悪いわね

「僕は…こっちの人の方が…」

そう言い、アイリスを指す。

「あら、ありがと」

「・・・・・・・・・・・・・」

呆然としているフレッドリカ。

「おーい…」

アイリスが目の前で手を振る。

しかし、反応は皆無。

「ま、いいや…よくわかんないけど、行こ」

「…う、うん」

あっけらかんと言うアイリスに驚きながらも歩き出す。

「お前、スゴいなぁ」

アルバスが感心したように言う。

「そーう？」

１０ｍ歩いた位で、我に返ったフレッドリカが…負け惜しみ？なのかな…を叫んできた。

「ま、まぁあんな人に私の美貌が分かるわけないわよねー！ア、アナタたちなんて私からみたらアリんこよ！」

オーッホッホッホ！と高笑いするフレッドリカ。

その瞬間、アイリスとローズからプチッという音がした。

２人がクルッと振り返り、歩いていく。

それもニッコニコの笑顔で。

なんていうのかな…悪魔の笑顔って感じ？

とにかく……ご愁傷様です…

「ね、……今何て言った？」

「…何にも」

危険を感じたのか、しらばっくれるフレッドリカ。

「あたしにはハッキリ聞こえたんだけどなー」

「私も聞こえたわよ」

「えーと、何だったっけ？」

「んとねー、確か…アリんこ？…だったかな？」

「え～！ソレはヒドい！！」

「アリんこってどっからそんな変な発想が生まれるかね～」

「ローズがこんなヤツより下のわけ無いのにね」

「それをいうならアイリスもよ」

「そうかなぁありがと…まぁあたしもね、偉大になれる自信あるなぁ」

「私も！」

「あたしたちの…」

「目の前にいる…」

「ハッフルパフの…」

「「最低女よりわね！」」

…2人の独壇場だ。

皆、ポカーンとしている。

「スゲェ…」

アルバスとクライドがハモる。

「あ、ハモったね～」

「すごいわぁ私たち！」

「まぁそれだけこの最低女（フレッドリカ）の印象が悪すぎっていう事ね」

「あ、同感」

「こんな女にスコーピウスが惚れるわけ無いわね」

「１００％無いわね。やっぱり、ドーセットの勘違いだわ」

「うんうん！絶対この悪女（フレッドリカ）が一方的に攻めただけね」

「あ～絶対そうだわ」

「あの自信過剰！…有り得ないわぁ」

「真実薬飲ませといて、自分じゃなかったからって開き直るとはねぇ…おかしいよね、ハッキリ言って」

「おかしいに決まってるじゃん！”オーッホッホッホ！”だって…

古〜ッ！」

「いつ頃の笑い方よ…」

「え、１８００年頃じゃない？」

「うわっ時代遅れ！！」

「それにあの笑い方って…」

「悪女とか犯罪者とかが笑うやり方よね」

「そうそう！」

「あ〜無理無理…あんなのよく出来るわね」

「ホントだよ…恥ずかしくないのかねぇ」

「自信満々すぎてそーゆーのが分かんないのよ！」

「あ、それあるかも！」

「でしょでしょ〜！」

「…あ！分かった！」

「？」

「あの時、何でスコーピウスが赤くなってたかが！」

「え！分かったの？」

「推測だけど…」

アイリスがニヤニヤしながら話し始めた時…

「あ」

向こうからスコーピウスが来た。

「何してるんだ？」

不思議そうに聞いてくるスコーピウス。

「…アレよ、アレ」

「……」

「あの時、どーせこの女は”ドーセットなんかより私の方が断然いいわよね！…やっぱりそうよね！なんたって私に勝てる人間なんて居ないもの！”的な意味わかんないこと言ったんだよ」

「うわ！キモッ」

「それで”私のこの綺麗すぎる金髪とドーセットのあの汚い黒髪、私の方が絶対いいわよねー！ねッスコーピウスゥ？”とかなんとか

言ったんじゃない？」

「何で髪なの？」

「だってこの女の唯一の取り柄ってこの髪だけじゃない？」

「あ、そーいやそうだね！」

「でしょ？…そう言われたから、スコーピウスは”ドーセットの髪は綺麗だと思うよ”って言ったんだと思うんだ。で、それを言ったあと何か急に恥ずかしくなって真っ赤になっちゃったんだよ！」

「筋、通ってる！」

「そしたら、コイツが強引に腕とって抱きしめちゃったんじゃない？そこを見られた…」

「へえ～！アイリスすごい！」

「でしょ？スコーピウス？」

気、気づいてたんだ…

スコーピウスを見ると赤くなってる。

「あ、図星？」

「キャー、頬が真っ赤っ赤？」

「…そう、なの？」

ドーセットが下を向きながら言う。

カアッと真っ赤になったスコーピウス。

「……ま、まぁ…うん」

そう言い、そっぽを向く。

わたしたち（わたし、アルバス、クライド、ロウァン）は顔を見合わせ、ニヤッと笑う。

だって、笑っちゃうじゃない！

あのスコーピウスが真っ赤とか…

「ま、どーせこの女は”私に赤くなったんだわ！ウフッ”とでも思ってるんでしょうけど」

「クッ……お、覚えてなさいッ！！」

なんかよく分かんない捨て台詞を吐きながらドスドスと去っていく。

ふしゅる～

アイリスとローズの「気」が抜けたみたい。

「あ～、言い過ぎたかなぁ」

「でも、良いんじゃない？いっつも甘やかされてたんでしょ、あの様子だと」

「意外と夢中になっちゃったね」

「アハハハハ」

そんな2人にアルバスとクライドが駆け寄る。

「アイリス！ローズ！お前たち、スッゴイなぁ」

「同感！アイツのあのどんどん青くなってく様子！面白かった…」

…面白いと言っていいの？

「エヘヘ…」

「ホラ、あっちも仲直りしたみたいだし！ハッピーエンドで終わりってことで！」

2人が…（後書き）

うひゃ～楽しかった♪
こんちは、ジニーです。あ、名前変えました！
てことで（？）雑談コーナー！

～雑談コーナーＮＯ．１～
メンバー：ジニー（つまり、ウチ）・テレサ
｛来週からはゲストをお呼びするかもです｝

ジ「ちわーっす！」

テ「こんにちは、見て頂きありがとうございます！」

ジ「しっかしテレちゃんの友達いい子居すぎじゃない？」

テ「…テレちゃん？」

ジ「いいでしょ！その呼び方で、ハイ決まり！」

テ「……」

ジ「ホラ、黙らないのー！」

テ「…確かに、みんないい子ばっかりだな～」

ジ「いーなぁ…ウチの友達、心配性な子とかハリー・ポッターのことになるとキャラが変わる子とかいつの間にか何故か本読んでる子とか…」

テ「へ、へえ～」

ジ「みんなだーい好きだけど？」

テ「は、はあ…」

ジ「いえ～い☆」

テ「テンション高いね…」

ジ「ダメ？」

テ「い、いや…ダメってわけじゃ…」

ジ「なら気にしなぁ～い！」

テ「…はぃ」

ジ「次どんなのなの？」

テ「えと…まぁ、日常って感じのお話かなぁ？」

ジ「確かにこのお話は”非”日常だからねぇ」

テ「うん。この2人、また喧嘩するんだよねー。ま、2・3年生の頃だけど」

ジ「あらまぁ…」

テ「あ、ではこの辺で…」

テ「じゃーねー！」

ジ「さいならー！！」

お茶会（前書き）

会話文ばっかり～♪

お茶会

授業が終わり、みんなで雑談中。

「今日の授業、楽しかったねー！」

「え～！そうかぁ？」

「それは、ローズの得意科目があったからじゃないの～！」

「アハハ」

「でも、アルバスってやっぱり箒で飛ぶの上手いなぁ」

「絶対2年生になったらクィディッチのチームは入れるよな！」

「応援するよー！」

「そんなに上手いの？僕・・・」

・・・・・はぃ？

「え！実感まるでなし！？」

「だってさぁ・・・」

「フレッドとジェームズが上手いのは当たり前なんだから！だって、

ビーターなんでしょ？」

「そんなもんか？」

「そんなもんよ」

「でも、スコーピウスの方が上手いと・・・」

「同じくらいなんじゃないか？」

「・・・・・・」

「そうよ！アル、上手すぎるもの！」

そんなことで、ビースカブースカ言い合いをしているとジェームズたちが声をかけてきた。

「おーい、アルたち！今日はハグリットのお茶会だぜ？」

「早く来いよ！糞爆弾投げるぞ～！」

・・・糞爆弾て・・・

「ちょっと！まだ持ってるの！？・・・・・・没収！！！」

「おい！キャサリン、取るな！泥棒だぞ！！」

「1年生に向かって糞爆弾投げようとするのがいけないの。」

「・・・あーあ、つれねーなぁ」

げんなりとするフレッド。

「はいはい。・・・ホラ、行きましょ？」

しかし、全く動じないキャサリン。

やっぱり、かっこいー！

「はーい！」

「・・・キャサリンの言うことは聞くんだな・・・」

「だって！キャサリンはオトナだもんな！」

「フレッドのこと抑えられるのってキャサリンだけだし」

「そうそう！」

「ありがとね」

キャサリンがはにかみながら言う。

「大丈夫！・・・事実だから」

「事実じゃねぇ！・・・大体この俺が誰かに抑えられるなんてなぁ！１００％な・・・」

「１年生に向かって喧嘩腰にしないの！」

フレッドの言葉を途中で遮り、あっけらかんと言う。

「……はぃ」

「やっぱり、抑えられてんじゃん！」

「…くそッ」

「「「アハハハハハハハハ」」」

たわない話をしながら、ハグリットの家まで歩く。

２０分程歩くと、大きな家が見えてくる。

「あー、毎回毎回疲れるなぁ」

「同感…」

ドンドンドン！！

分厚くて大きいドアを思いっきり叩く。

ガチャという音と共に、ハグリットが顔を出す。

「おぅ、お前らか！入れや、お茶入れとるぞ」

「おりがと、ハグリット！」

ぞろぞろと入る。

大きな大きなテーブルに、少しズレた感じでテーブルクロスが掛けてある。

そこに無造作に置かれた、お茶とお菓子。

ハグリットらしいなぁ

みんなが思い思いの席に座る。

わたしの席は窓側。

隣は、ジェームズとドーセット。

「「いっただっきまぁ～～す！！！」」

いつもみたいに食べ始める。

このお茶会、1か月に一回やることになってるんだ。

わたしの楽しみの1つだよ。

「んっ！？コレ、旨ッ！！」

「え～うそっ…ホントだ！おいしー！！」

「コレも美味しいよぉ」

「うおッ！すごい！」

「このお茶も手作りなんでしょ？おいしぃ～」

「ね～ホッとするっていうか…」

「体の中から温まる…って感じ？」

「そうそう！そんな感じ！！」

「ハグリットってすごいなぁ～」

「ホントホント！」

「尊敬しちゃうよ！」

「あの禁じられた森にもよく入ってるんでしょ？」

「それなら、俺たちも入ってるぜ～！」

「あ～！やっぱり行ってるんだ！絶対ダメなんだから！」

「げっ…前が居るの忘れてた…」

「何それ！サイアク…」

「フレッドたち、あそこに入ってるの！？」

「すごい…」

「へっへ～すごいだろ～」

「その根性、分けて欲しいなぁ……」

「そりゃあ、無理な要求だぜ！」

「ハハハハハハ…」

なんだかんだで過ぎていく、麗らかな一時……

お茶会（後書き）

こんにちは～ジニーです☆
更新ラッシュ終わりましたw
てことで、雑談コーナー！

～雑談コーナー～

ジ「ちわーっす！」

テ「こんにちは～」

ジ「いいねーハグリット！」

テ「結婚もしたから、前よりも料理上手くなったんだって～」

ジ「うひょ！食べてみたぁ～い」

テ「アハハ……で、今日のゲストは誰？」

ジ「さて、誰でしょ～？」

？「やっほ～！」

テ「ド、ドーセット！？」

ジ「てことで、ドーセットです♪」

ド「いえい☆ココって何すんのー？」

ジ「名前の通り雑談だぜぃ！」

ド「ホント！？楽しそー！」

ジ「でしょでしょ～」

ジ・ド「いえ～～い！」（ハイタッチw）

テ「…なんか息、合ってる…」

ド「アイリス並みにテンション高くて楽しいんだもん！」

ジ「いいじゃん！」

テ「……はぃ」

ド「わかればいいの！わかれば～！」

ジ「ね～！」

ド「ね～！」

テ（もう知らない……）

ジ「次は何あるのー？」

ド「んとねー、クィディッチの観戦かなぁ…グリフィンドール対スリザリンの！」

ジ「へえ～！楽しみやなぁ」

ド「楽しかったよ♪スゴイよね～アレ」

ジ「でわ…」

ジ・ド「じゃーね～～！！！」

テ（わたし、忘れられたよね…）

クィディッチ　G対S　？（前書き）

クィディッチと書きましたが、描写全くありません！
短いです、しかも。

クィディッチ　G対S　？

今日は、朝から騒がしい。

その理由は…クィディッチ！

グリフィンドール対スリザリンだ。

グリフィンドールのチームは、キーパーが5年生のマイク・ウッド、ビーターがフレッドとジェームズ、チェイサーが4年生のジョージー・メリアと2年生のケイ・ムースと6年生のアリーナ・ユーリ、そしてシーカーが7年生のエイミー・ナイト。

このチーム、すっごい強いらしいんだ。

スリザリンが倒そうと躍起になってる。

あー、楽しみ！初めての対戦だから、1回も見たことなかったんだよね。

うわぁ…ムズムズしてくる……ッ！

1年生は皆、そんな感じみたい。

みんなそわそわしてる。ま、わたしもその1人なんだけどね

「うへーっ試合、楽しみだなー！」

アルバスが興奮したように言う。

「早く始まんないかなぁ！」

「アル～～！僕の手袋知らねーかぁ？」

ジェームズがユニフォームを着ながら聞いてくる。

「それなら、アソコにあるんじゃないか？」

「さんきゅ！」

だんだんと慌ただしくなってくる。

「よし！準備完了！」

「おぅ！今日もパアッと勝つぞ」

力むジェームズとフレッド。

「2人とも頑張れ！」

「絶対、勝ってよね～！」

「「おう！任せときな！！」」

意気揚々とグラウンドへ向かう。

「んじゃ、僕たちもそろそろ行く？」

「りょーかいっ！」

クィディッチ　G対S　？（前書き）

うん、迫力無いよ。
表現の仕方も分からないな、はい。

クィディッチ　G対S　？

場所が変わり、クィディッチのグラウンド。

グリフィンドール派とスリザリン派に分かれて、選手が出てくるのを待つ。

それにしても、すごい…

マグル育ちのわたしにとって、見たことのないグラウンド。

背の高い、丸い輪っかの付いたポール。

それぞれの色の横断幕。

生徒だけでなく先生まで顔を上気させて盛り上がる。

その時、先生たちの前に1人の生徒が出てきた。

「では、選手が入場いたします！！」

その途端、ドアがバンと開き両方の選手が出てくる。

そしてグルッと旋回したりして、指定の自分の位置に着く。

・・・・・・・・・・・・アレ？

スリザリンの選手の中に…クレメンズが居るような気がする。
気のせい…だよねぇ？だって、アイツ1年だし。
「…ね、ねぇクレメンズ…居るような気がするんだけど。」
ローズが恐る恐る聞いてきた。
「…ホントだ…」
「権力使ったんだぜ、多分」
「うわ、最低…」
すると、わたしたちの視線に気づいたクレメンズがこっちを向く。
そして、ドーセットを見つけた彼は……
……ウィンク。
スリザリンの女子生徒はキャー！と叫んでいる。
しかし、当のドーセットは引きつった笑いを浮かべている。
再度、クレメンズがウィンクをする。
するとドーセットは隣にいるスコーピウスの袖を掴み、「……吐き気がする…」と呟いた。
「「……」」

その時、大きな箱を抱えたフーチ先生が入ってきた。

「みなさん、準備はいいですか？…正々堂々と戦いましょう！！」

そう叫ぶと、箱を開け金色の小さくて綺麗なボール――――スニッチ――――を放す。

次に今すぐ飛び出ていきそうなボール――――――ブラッジャー――――の鎖を解き放つ。

そして最後に普通の唯のボール――――――クアッフル――――――を放り投げる。

その瞬間、下の方に待機していたチェイサーたちが動き出す。

「さあ、始まりました！…さて、最初にクアッフルを取ったのは？…おお！グリフィンドールのジョージー・メリア選手です！」

いえ～～～い！

グリフィンドールの席から声が飛ぶ。

旗をブンブン振ったり、マフラーをグルグル回したりする。

そしてジョージーは、向かってくるスリザリンの選手を振り切り、ゴールへ向かった。

そのままゴールへ投げる。

キーパーの反応が遅れる。

すると、円の中にまっすぐと…

「開始早々、グリフィンドールに先制点！！！」

「わ～～～～～～～～～～～～～～～！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

ひときわ大きな歓声が沸きあがる。

そして入れ返され入れ替えし、セーブしたりミスしたり…

会場がどんどん白熱する。

現在は８０－５０。グリフィンドールの３０点リード。

「えー！？なんか、ビーター同士の戦いが始まった様子です！」

！？！？

見てみると、ジェームズとフレッド、スリザリンのビーター２人がブラッジャーを打ち合っている。

フレッドが相手に向かって打つ。

そのブラッジャーを相手側の1人が凄い勢いで打ち返す。

フレッドの反応が遅れた。

危ないッッ！

キャサリンが声にならない悲鳴を上げる。

しかし、反射神経がいいのかクルッと1回転しその場を凌ぐ。

グリフィンドール全体から安堵のため息が出る。

「ジェームズ頼むぞ！」

「おぅ！！！」

ジャームズがニヤッと笑った。

そして近づいてきたブラッジャーを、フレッドに向かって打った奴とは違う人に向かって打った。

不意を突かれたスリザリンのビーターはそのブラッジャーをまともに食らった。

そのまま地面に落ちる。

「よっしゃ！仇送り成功～♪」

あ、仇送り…

「おぉ！？次はまたもやグリフィンドールのシーカーがスニッチを見つけた様です！」

キャッ！すごい！！

あと５０ｃｍの所まで迫っている。

それを聞きつけたクレメンズがそこへ一目散に向かう。

あと３０ｃｍ……１５ｃｍ……１０ｃｍ……

急いで、クレメンズが駆けつけるが、間に合いそうもない！

やった、勝てそう！

皆が固唾を飲んで、見守る。

５ｃｍ……３ｃｍ……１ｃｍ……

手を思いっきり振り、スニッチを掴む。

３秒の沈黙の後、爆弾が爆発したくらいの音量の歓声が響く。

「よっしゃぁぁぁぁぁぁ！！！

キャサリンは放心したように座り込む。けど、笑みが広がってる。

男子たちは思いっきりジャンプ。

わたしとローズはハイタッチの連続。

「やったね！！」

「賭け成功！」

アルバスたちは誰かと賭けてたみたい…

「この後、いっつもパーティーやるんだぜ！ジェームズたちが厨房からくすねてきたりして食いもん持ってくるんだ」

「てころで、談話室に集合！！！！」

「りょーか～～い！！！！！」

クィディッチ　G対S　？（後書き）

こんにちは、ジニーです☆
行事が重なって、毎日更新は出来ないと思いますが、よろしくです♪

お知らせ

お知らせです♪

プロフィールんとこに、友達と合作とかなんとかって書きましたが、この作品はわたしだけで書いてて、他の作品で同じキャラが出てきてます。

その作品も是非読んでください！

ゆき・作の『闇再び』
ｈｔｔｐ：／／ｎｃｏｄｅ．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｎ１６５９ｘ／

テレ・作の『ジェームズポッターと隠れた罠』
ｈｔｔｐ：／／ｎｃｏｄｅ．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｎ６８４４ｗ／

ピンポン玉・作の『スコーピウスの日記』
ｈｔｔｐ：／／ｎｃｏｄｅ．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｎ５２９１ｗ／

です☆

ジェームズポッターと隠れた罠はジェームズが1年生の時からのお話です。

内容もおんなじような違うような…

ま、似てますね。

スミマセン、皆が書き始めたのでちょっとした宣伝です♪

お粗末様でした・・・＞＜

次は…　～スコーピウス～（前書き）

～〇〇〇～の時は、〇〇〇目線で書いていきます。
何にもなかったら、テレサ目線です♪

あと、登場人物紹介増えました！

次は…　～スコーピウス～

１２月に入ってすぐ。

大分寒くなったし、ホグワーツもクリスマス色に染められている。

「ふへ～っ疲れた…」

授業が終わり、ドーセットが談話室のソファーにゴロンと寝ころぶ。

「ね、この後何するー？」

ゴロゴロしながらドーセットが言う。

「ん～、グリフィンドールんとこでも行く？」

「いいね！ソレ！」

今まで心底疲れた顔をしてたのに、パアッと花のように輝きはじめる。

……この変わりよう…

「ん、僕も賛成！」

楽しそうだしね

「早速行こうよ！」

リサがニコニコしながら言う。

「りょーかいッ！ちょっと待ってて、お菓子持ってくるね」

ドーセットがパタパタと上に上がる。

そのあとをボーッと見つめていたら、リサがニヤニヤ笑っているのが目に入った。

「何、笑ってんだよ？」

「べっつにぃ～クフフ…」

「ちょ、ホント何笑ってんのさ」

「だぁかぁらぁ～何でも無いってぇ～アハハ…」

「いや、何でもあるだろ」

「あはは～～～～」

「……」

「お待たせ～行こっ！」

今までのやり取りを全く聞いていないドーセットがニコニコ出てきた。

「「……」」

「？どしたのぉ？」

「…何でも無い」

「そう？…それより、早く行こ～」

「ん、分かった」

細かいことは気にしないんだな…ドーセットって。

「ホラホラ、動いて～」

ドーセットに引きずられながら寮を出る。

この姿を見て、またリサがクスクス笑ってる。

キッと睨むと、クスクス笑いながら目を逸らされた。

何なんだ、アイツ（リサ）は…何がおかしいんだ？

＊　＊

しばらく歩くと…

「ハーイ？」

…アイツ（フレッドリカ）が出てきた。

最近前によく現れる。

ストーカーしてんじゃないかってくらい。

「また、ドーセットと居るのぉ？私たちの所の方がいいわよ～歓迎したげるわん」

……？

「…いいデス…」

「え！ホントにぃ？やっぱり私のほうが魅力的なのねッ！！きゃっ」

「……」

どうやったらそうなるんだい？

「ねぇ、どう聞いたらその返事に聞こえるの？耳がもう１２歳にして老化しちゃった？それとも、そういう風にしか考えられない頭なの？」

リサ、いっつもおっとりしてんだけどなぁ

コイツのことになると性格が怖くなる。

「スコーピウスぅぅ～私たちの所に来るんだよねぇ？ねッ？」

上目使いで目をウルウルさせながら聞いてくる。

…ドーセットがやったら可愛いんだろうな……って僕は何を考えてるんだ!?

え、んと、まぁ、とにかく…

「い、いや…グ、グリフィンドールに行くからサ…ハ、ハ、ハ……と、とにかくドーセットとリサ、早く行こう!ホラ!!」

早く、ここから逃げよう…

ドーセットがますます無口になるし、リサが壊れかけそうだし…

なんか後ろから「ちょっと、スコーピウスぅ~?待ってぇ~♪」っていう声が聞こえた気がしたけど…気にしない…

＋＊＋＊＋＊＋＊＋＊＋＊

「んもう!何よ、あの最低女!ストーカーなの?12歳なのに!?」

リサが憤慨してる。

「ま、まぁ…落ち着いて、ね?」

ドーセットが宥める。

「…ドーセットはいいの！？」

「え？」

次は…　～スコーピウス～（後書き）

んと、1話にまとめるつもりだったんですけど。
長くなったんで、2話にわけちゃいます☆

～雑談コーナー～

ジ「いやっほう！」

テ「こんにちは～」

ジ「2話ぶりだねー元気してた？」

テ「勿論！ジニーは？」

ジ「ショックのどん底に落ちてた。」

テ「…えぇ！？あのジニーが！？」

ジ「落ちてちゃ悪いか！」

テ「え、あ、いや…と、とにかく今日のゲストは？」

ジ「…ホントは前の回で呼ぼうと思ってたんだけど、ショックでヤバかったんで今回呼んだんだ。…仇送りのジェームズ君！」

ジェ「ちゃーっす！呼んでくれてありがとーございまぁす」

ジ「やっほ～よろしく♪」

テ「仇送りのｗ」

ジェ「ね、さっきから聞いてたけどさ。ショックって何がショックだったんか？」

ジ「……色々」

テ「それは知ってる。」

ジ「…ウチは青山剛昌先生の作品と高橋留美子先生の作品が好きなのは知ってるでしょ？」

テ・ジェ「うん、知ってる」

ジ「それでね、るーみっく（高橋留美子先生）の作品のなかでらんま1／2っていうのがあるんだけどね。それが…」

テ・ジェ「それが…？」

ジ「…実写化しちゃうのよぉ～～！！！」

テ・ジェ「……」

テ「ショックじゃないじゃん」

ジェ「嬉しいんじゃね？」

ジ「…永遠の二次元が良かったぁ～～～～～～！！！！！！！！

！！！！」

テ「……あ、そ」

ジェ「そゆことなんだな…」

ジ「シクシクシク）ｒｙ」

テ「だいじょーぶ？（棒読み）」

ジェ「大丈夫じゃなさそうだけど」

テ「そだね、…じゃ」

ジェ「代わりに終わらしとくか」

テ「了解！」

ジェ「…てことで」

テ・ジェ「「さよーならぁ～～＾＾」」

ジ「シクシクシクシクシク）ｒｙ」

喧嘩っ早い、ドーセット　～スコーピウス～

「・・・ドーセットはいいの！？」

「え？」

いつもより数百倍強い調子で言われ、少したじろぐドーセット。

「だから、あの最低女がまとわりついてるの、見てて大丈夫なの！？」

「よ、よくないよ・・・・・・でも・・・」

「だったらビシッと言ってやりなよ！」

「な、なんて？」

「『スコーピウスにまとわりつかないで！』とか！」

「でも、さ・・・私が決めることじゃないもの・・・・・・」

「・・・はぁ・・・・・・何でそんなに意気地が無いかなぁ・・・」

・・リ、リサ！？

「・・・・・・え？」

「だから・・・！なんで、なんでさ！そんなに根性が無いの！？・・・たまには堂々と言ってみたらどう！？」

ちょ、言いすぎだ・・・

「リ・・・サ？」

「ホラ！ここまで言われても全然言い返さないじゃない！・・・クライドには別かもしれないけど、友達にだってそれくらい言わなきゃ！！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「ねぇ！？」

「・・・わ、私には・・・」

「何？」

「・・・私にだって！私なりに・・・色々あるんだから！リサには・・・・関係ないじゃない！！！」

・・・ドーセットも言いすぎだよ・・・

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・あ、そう。じゃ、もう関わらないわ」

少し声が震えてるけど冷静に静かに言い放つリサ。

「・・・スコーピウス、帰るよ」

ドーセットに手首を掴まれて引きずられる。

さっきは笑ってたのにリサも無表情だ。

そのまま、リサはグリフィンドールのところまで歩き、教えてもらった合言葉をいい、バン！と大きな音を立てて入っていく。

「・・・ドーセット？」

「・・・・・・・・・・・・・」

無言のままスタスタと歩くドーセット。

角を曲がってすぐ、早足だったドーセットの足が止まる。

そして、そのまま蹲(うずくま)った。

「・・・・・・だい、じょうぶ？」

顔を覗き込むと、ドーセットの目に涙が溜まっていた。

「・・・だい・・・じょう・・・ぶ・・・だよ・・・・・・・・・・・」

切れ切れに呟くドーセット。

そのまま1分ほど経過すると、耐えられなくなってきたのか嗚咽が漏れてきた。

「うっ・・・・・・・・・くっ・・・・・・・・・・・・・・ふうっ・・・・・・・・・」

我慢、しなくてもいいのにな・・・

「ドーセット？・・・耐えられないんなら泣いてもいいんだよ？・・・我慢しないほうがいいと思うけど」

「・・・・・・」

「思いっきり泣いたら、落ち着くんじゃないか？」

ふっとドーセットが顔を上げ、僕の顔をジッと見つめる。

？？

「・・・・・・・・・・・・・・・・・スコーピウスっ！！！！」

！？！？！？！？！？！？！？！？！？！？！？！？

ドーセットが飛びついてきた。

そのまま大声で泣き始める。

・・・・・・・・・・・・・・・

そおっと手を背中に回し、さする。

泣き止むまで・・・・

＊＋＊＋＊＋＊＋＊＋＊＋＊＋＊＋＊

１０分ほどすると大分泣き止んできた。

「・・・・・・ねぇ、私・・・これから、どうしよう？」

囁くような小声で聞いてくる。

「ドーセットは、仲直りしたいんだろ？」

「うん・・・・でも、私リサが言ってること・・・分かんない・・・」

「そっか・・・お前、キリスト教だっけ？みんな、平等みたいな考え方だもんな」

「・・・だからリサの言ってることがわかるようになるまで・・・」

「距離を、置く？」

「・・・うん、そうする・・・」

喧嘩っ早い、ドーセット　～スコーピウス～（後書き）

ちわっす、ジニーです☆

～雑談コーナー～

ジ「いえい☆ジニーやで」

テ「テレサです、こんにちは～」

ジ「あ～疲れたわぁ」

テ「・・・毎回、挨拶の言葉変わるよねぇ」

ジ「そんなんどーでもいいやんか！・・・今日のゲストはシリアスっぽいスコーピウス君！」

ス「え？あ、こんにちは・・・」

テ「・・・シリアス？」

ジ「シリアス知らんのぉ！？シリアスっちゅうのはぁ”きわめてまじめなさま、本格的なさま、事態などの深刻なさま等の意味”って意味やで！（ウィキペディアから抜粋）」

テ「へ、へぇ～」

ス「僕、そんなに深刻そうか？」

テ「さ、さぁ・・・？
あとさ、何故に関西弁なの？」

ジ「いいやろ！好きなんやもん！」

テ「そ、そうですか・・・」

ス「関西弁って何？」

ジ「それはやなぁ・・・”近畿方言（きんきほうげん）とは、近畿地方のうち、兵庫県但馬と京都府丹後西部を除き、福井県嶺南を加えた範囲で用いられる日本語の方言の総称である。西日本方言に属する。上代から近世中期までの中央語である畿内語・近世上方語の系統を汲む方言で、現在も東京方言や首都圏方言に次ぐ認知度と影響力を持つ。関西弁（かんさいべん）と呼ばれることもあるが、「関西弁」は大阪弁を中心に見据えた呼称であり、三重県の方言が近畿方言であるにも拘わらず「関西弁」のイメージから外されやすいなど、近畿方言の実態に沿っているとは言い難い。漠然と西日本全域の方言を包括して「関西弁」と呼ぶことさえある。”やって。
何書いとんのかサッパリ分からんなぁ」

ス「・・・は？」

テ「長すぎだよ！」

ジ「あ、これもウィキペディアから抜粋や」

テ「・・・・・・・」

ス「ウィ、ウィキペディア・・・」

ジ「駄目なん!?」

テ「い、いや・・・」

ス「全然ダイジョブです・・・」

ジ「分かればいいん!分かりゃ!」

テ「・・・・・・・・・・」

ス「ハ、ハ、ハ・・・ドーセットより、面白い人だね（おかしい人・・・）」

ジ「何か言った?」

ス「べ、別に・・・アハハハハハ」

ジ「ま、いーや」

ス「大雑把なところもドーセットに似てるな・・・」

ジ「次、何?」

テ「えとね・・・ジェームズがちょっとした提案してくれるんだよね?」

ス「うん。クリスマス休暇の前のちょっとした思い出だとか何とかって」

ジ「・・・いいのぉ楽しそうやなぁ」

テ「では・・・」

ジ「ばぁ～い！」

テ「じゃねー！」

ス「次回も見てください！」

JとFからの提案（前書き）

オリキャラまたまた来ちゃったw
レイブンクローのファーンです！
次の次はものすごい勢いでたっくさん登場すると思います。

JとFからの提案

「お～い、ちょっと提案～」

あともう少しで、クリスマス休暇というとき、ジェームズとフレッドから声がかかる。

「なんだよ～」

アルバスが不機嫌そうに返事をする。

「おいおい、不機嫌そうにすんなよ。楽しいことなんだからさ」

「…何？」

「休暇の前に、パーティーするんだ。勿論来るだろ？」

皆の目がパアッと輝く。

「このパーティーは俺たちの主催だから、招待した奴だけ来れるようになってんだぜ」

フレッドが言葉を引き継ぐ。

「そして、条件が２つ…」

「僕たちは厨房から食い物くすねてくるからさ…」

「アルバスと誰か1人がアレとアレ使って、ホグズミードまで行ってほしいんだ」

「それっくらい、軽いもんだろ?」

アレ・・・?

「アレって何?」

みんな疑問に思ったようで、アイリスが代表として聞く。

「ん?アル、言ってないのか?」

「あのな、僕たち父さんから透明マントと忍びの地図っていうのを、貰ったんだ。」

「それで、ホグズミードまでの近道も書いてあってさ」

「へえ~!あたし、行きたい!」

アイリスの目が、悪戯そうに光る。

「アイリスってそういうの好きだったっけ?」

ロウァンが聞く。

わたしもそう思ったんだよね

「え、知らなかったぁ?あたし、悪戯とか規則破りとかワクワクし

ちゃう派だよ！」

ふぅん、意外だなぁ

「ま、そゆことで、よろしくな！」

「んで、２つ目は、ウェイターやってほしいんだ。」

「「ウェイター！？」」

ウェイターって、水とか食べ物とか運んでる人のこと？

「そ、後で服渡すからさ。そっちもよろしく！」

「…ちょ、ちょっと待って！どこでするのよ？」

ローズが焦ったように聞く。

そういえば、ご最もな質問だ。

パーティーなんてやるとこある？

「ククク……それが、見つけたんだよ！招待した人じゃないと絶対入れないようになってるし。」

「だから、場所は？」

「大広間を左に曲がって１００ｍ位歩いたとこ」

「…そんなところに部屋なんてあった？」

「行きゃ分かるって！」

「……ほーい」

「んじゃ、よろしく！」

そう言い、手を振り振り去っていく。

「それじゃ、テレサとローズがドーセットたち誘ってきてよ！他にも誘っていいし。」

「うん！クライドとロウァンはリサたちね。最低女（フレッドリカ）と変態男（クレメンズ）だけは誘わないでよね」

「ＯＫ！」

「分かってるって！」

今、ドーセットとリサが喧嘩中。

だから、最近はドーセットはスコーピウスと２人で。リサはファーンとヘニリーと３人で行動してるみたい。

「ほら、テレサ行こう！」

「うん！」

ドーセットもスコーピウスも「ホント!?」「行くに決まってんじゃん!」という返事が即答で返ってきた。

リサたちもOKだって。

他にも友達たくさん呼んだし、同級生（クラスメイト）も全員呼んだ。

ウェイターはどうなるか分からないけど、とにかく楽しまなきゃ！

JとFからの提案（後書き）

は～い♪ジニーです☆
クリスマスパーティー！妄想広がりまくり～
場所は勿論アソコです！

～雑談コーナー～

ジ「ふえ～い！ジニーちゃんです♪」

テ「こんにちは、テレサです！」

ジ「いーなぁクリスマスパーティー！」

テ「楽しいよ～」

ジ「子供だけっていうのがまたいいなぁ～」

テ「出来ないの？」

ジ「出来るわけないじゃん！！」

テ「ｗｗｗ」

ジ「では…今日のゲストは不機嫌アルちゃん♪」

ア「僕は不機嫌じゃないし、ちゃん付けやめて！」

ジ「ホラ、不機嫌ジャン」

ア「……」

テ「ジニーったら…変な紹介の仕方やめなよ！」

ジ「え～、なんでぇ」

テ「だって”仇送りジェームズ君”に”シリアスっぽいスコーピウス君”に”不機嫌アルちゃん”でしょ？」

ジ「いいでそ、別にぃ～」

ア「でそ？」

テ「言い間違え～？」

ジ「ワザとに決まってんじゃん！そーゆーのがあるの！うちの〇姉妹ってやつで！」

テ「ふぅ～ん」

ア「…ホントにドーセット並みにテンション高いね」

テ「でしょ！」

ア「ついてけないよ」

テ「疲れるよ…わたし、これ毎回なんだよ？」

ア「うわ、サイアクじゃん！」

ジ「ちょっとぉ？何、悪口言っとるん？」

テ・ア「べっつにぃ～」

ジ「うわぁヒッドーイ！」

テ「はいはい」

ジ「で、次は何？」

ア「あ、機嫌悪くなった」

テ「ええ～っと、次はねぇ…クリスマスパーティー！……直前だよ～」

ジ「あ、何それ。”直前”なの？」

テ「アンタが書いてるんでしょ」

ジ「悪かったですねーだ！」

ア「ハ、ハ、ハ…」

ジ「んもう！いいや！じゃね！フンッ」

テ「……」

ア「……」

テ「…ホントにいなくなっちゃった」

ア「じゃ…」

テ・ア「さよーならぁ～（＾ｏ＾）／／」

パーティー直前　？（前書き）

えー、んと長くなったので、こんなのに？付けちゃいましたｗ
アハハｗｗ

でわ…

パーティー直前　？

そして、7時…

始まるのは8時半。

わたしたちの集合が8時だから、それまでに色々と準備する。

ジェームズは夕食の時にもう、厨房まで行ってきてたみたいで、透明マントをアルバスに渡していた。

「んじゃ、よろしく頼むぞ！くれぐれもバレないように……」

「OK！」「了解っ！」

厚着をした、アルバスとアイリスが一見ただの古ぼけた羊皮紙一（もちろん忍びの地図）とお金、それとおっきなバスケットを両手に持って、透明マントを被った。

…うわっホントになんにも見えない！

こんなのあるんだ…

「ス、スゴ～い…」

「ほらほら、グズグズしてないで行って来い！」

「「はーい」」

何も見えないところから声がする。

正直言って、恐いです。はい。

「んじゃ、行ってくる！」

アルバスの声が聞こえたかと思うと、ドアが独りでに（そう見えるだけだけど）開いた。

「うひょ～、こんなんだったんか…」

「それにしても、お前の父さんスゲエの持ってんなぁ！羨ましい！」

フレッドが物欲しそうに言う。

「でも、忍びの地図はお前の父さんから貰ったものらしいぜ！何でも、フィルチに怒られてる時に糞爆弾、爆発させてその間に引き出しからくすねてきたものだとか…」

「！？そうなんか！俺の父さんもスゲー！」

「あ、そうだ！服…服…」

…！？

「ホイ！」

なんか、服を6着投げてきた。

…全体的に赤と白のアレみたいな服。どこからどう見てもあの服。
クリスマスといえば！みたいなあの服。

え～っと…これ、どんな反応すればいいのですか？

「ちょ、ま、コレ…」

クライドが抗議しようとするが……当然の如く無視された。

「朝、言った通り、ウェイターよろしくな！んじゃ、俺たちとキャサリンは色々と準備しなきゃいけないし、先行ってるな～…じゃな！」

早口でパーッと言ってのけ、足早に立ち去っていく2人。

わたしたちに拒否権はない……

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……無視、された」

「……しょうがないさ」

「……コレ、着るしか…」

「……ないんじゃない？…」

「……アルバスたちにもさ、」

「……文句言われそうだなぁ…」

「……テンション高いアイリスも・・・」

「……流石に言葉無くしそうだねぇ・・・」

「……本当に着なきゃいけないかなぁ？」

「……てかさ、こんなの持ってたのかよ…」

「……こんなのを着るの、幼稚園ぶりかも…」

「……てか、どこで着ればいいのかすらさぁ……」

「……うん、わかんないね。ローブで隠すとか…さ」

「……あーあ、ホントに着るのか…こんなのを…ううっ」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……あー、もう！あきらめるしかないんだよ、もう！！！」

「……そーだね…一回着ちゃえば、慣れるかもね……」

「……あの２人にも文句はあっちに言ってもらおう」

「……１００％文句言うからね、あの２人なら…」

「……ショックが納まってからだと思うけど…」

「……その間に納得させるしかないかも……」

「……納得させても文句は言うね、絶対…」

「……聞き流そうぜ、頑張ってさぁ……」

「……りょーかい、同意しないように」

「……分かってる…努力するわ……」

「……あ、耳塞ぐでもいいかも…」

「……それなら、いけるかもね」

「……ボーッとしてるでも…」

「……ソレ、いいかも～！」

「……出来るだけ頑張る」

「……何話してるの？」

「……何だっけ…？」

「……忘れたわぁ」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「…とにかく、アルバスたちが帰ってくるまで待つしかないね」

「…うん、それまでに覚悟決めとくか」

「…決められればいいけどね」

「…可能性は０％に近いよ」

「…ま、しょうがない。それは…」

「そだね…」

少々（？）壊れながら、アルバスたちが帰ってくるのを待ったとさ…！

パーティー直前　？（後書き）

いやっほ～ジニーです☆
階段台詞、楽しかったぁ
テレサとクライドへ
壊れさせちゃってゴメンネ♪

～雑談コーナー～

ジ「うひょ～い★」

テ「……こんにちは」

ジ「あれ～暗いねぇ」

テ「…わたしは壊れないもん！あんなにならないもん！！」

ジ「え、ここでもう壊れてるじゃん」

テ「……アンタが書いてるんだもん！」

ジ「はーいはい…今日のゲストは、恋愛に興味がない＋今日テレちゃんと一緒に壊れてたクライド君だよん♪」

ク「…＋ってなんだよ」

ジ「んと、そのままだよ～」

ク「…僕だって、こんなに壊れないさ！……姉ちゃんは別だけど」

テ「それ言っちゃダメ！…ドーセット、見てるんだよ？」

ク「ゲッ…マジ？」

ジ「来てるよ～ん！てか、ほとんど一応聞いてるんだよん」

テ「今日は、Ｆ．Ｎみたいな話し方だね」

ジ「Ｆ．Ｎ？…あ、アイツねぇま、いいじゃないのん♪」

ク「僕、すっげぇ苦手…」

テ「誰でも苦手じゃない？」

ク「ま、そーだろうけど」

ジ「はいは～い、Ｆ．Ｎについての講義（悪口）はここまでにして、次はなんですかー？」

テ「え、次はクリスマスパーティーの準備？でしょ？」

ク「あの服について、抗議しにいったんだっけ？」

テ「アルバスたちはめっちゃ怒ってたけど、止めたじゃない」

ク「あきらめて、手伝いに行ったお話か」

テ「多分、そうだと思うけど」

ジ「もう、ホントに適当だなー！ま、いーか
　てことで、また今度ね！」

テ「じゃねー！」

ク「もう、僕は壊れないから！…さようなら」

パーティー直前　？（前書き）

やっほぅ？ですｗ
？あるかも～♪んで、今回長いくせに、次は短いと思うよん★

パーティー直前　？

ボケーッと４人でソファーに座って４０分・・・・・・

「ただいま～！」

「お菓子いっぱい買ったよ～♪」

アルバスとアイリスが元気良く帰ってきた。

「あり？どーしたの？」

「ポカンとしてるけど」

その瞬間、目配せを交わしアルバスとアイリスを捕まえた。

「「＋＊《＃＄＆）”！，＆？＞＿｝＊｛＜＞！？！？」」

あの後、皆で話し合って色々と作戦を決めた。

絶対逃げると思ったから・・

「な、何！？」

「みんなどーしたのよ！？」

もがく２人を抑えて、上に連れて行く。

「ちょっと、ローズにテレサ！？」

「ゴメン、色々あってさ・・・目、瞑ってもらうよ・・・」

一応、謝っておく。

「ちょ、あ、え!?」

目隠しをして、服を脱がせ、あの服を着せる。

そして、脱がせたローブを羽織らせる。

そして目隠しをさせたまま、わたしたちもパパッと着替え、ローブを着る。

ホッと一息ついて、アイリスの目隠しを外す。

「ふひゃ～っホントにナンなの!?どうしたの!?」

「ゴメンゴメン・・・ホントに色々あるんだよ・・・」

「何、着替えさせたの?よくわかんないけど・・・」

「絶対に脱がせないからね!私たちだって着てるんだから!」

「何が?」

「ローブの中、見てみなよ・・・」

「え?・・・・・・・・・・」

5秒の沈黙の後・・・

「「ひえ～～～～～～～～～～～～～～～～～～っっっ！！！！！！！！」」

アイリスが思いっきり叫んだ。

同時にアルバスも向こうで叫んだみたい。

「いやあっ！何、コレ！！なんてゆー服なの！？あたしはナンなの！？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「もう、やだぁ～～！！あたし、どーすりゃいいん？てかこれは何！？どーゆー反応すればいいの？・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「そ、そだね…」

「もうすぐ始まるから、直ろうよ？」

「ガンバル……あいうえおかきくけこさしすせそ……あ、直ったかも！直った直った！！」

「あ、良かったぁ」

「あのままじゃ、出れなかったね」

「エヘヘ…とにかく下いこっか！」

「ＯＫ！…もう諦めたから。」

「うん、気にしないようにがんばろっか」

「そだね…」

下に降りると、ちょうど一緒にあっち（男子たち）も降りてきた。

みんなして、顔が青い。

「ね、もしかしてアルバス壊れちゃったの？」

「さっきまで、な…僕たちも壊れてたから人のこと言えないけど」

「ま、行こっか！」

「そだね…」

もう開き直った４人に対し、後ろでボソボソ言っている２人。

「ホラホラ、もう諦めて、思いっきりやっちゃえばいいんだよ！」

「……少しだけブツブツ言わせて…」

「アハハ…ｗ」

「えーっと、どこだったっけ？」

「大広間から…左に１００ｍじゃなかったか？」

「そうだった！え～っと…ここ？」

そこには…大きな鉄のドア――――――――というよりは扉？――――――がドンとあった。

「…デカッ！？」

「…こんなのあったっけ？」

「…知らなかった…」

「…すっごーい…」

ギィッと扉を開けると…

そこには大きな丸いテーブルが２０個ほど並び、大きな壇上などが

ズラーッと並んでいた。

4人でポカーンと絶句する。（アルバスとアイリスは見てもいない）

「お、遅いぞ～！」

「やっと来たか…」

「あ、みんな！」

「あら、みんな可愛い？」

フレッドとジェームズ、キャサリンとビクトワールが迎えてくれた。

パーティー直前　？（後書き）

こんちは～ジニーです♪
今日は体育祭でした～予約更新なので、まだやってもいないですけどw

～雑談コーナー～

ジ「イェースウィーキャーーン！！！ジニーですw（片仮名英語ぉ～♪）」

テ「こんにちは、テレサです！」

ジ「あー、疲れた疲れた～」

テ「へえー、良かったねー」

ジ「え、何それ！ひどっ」

テ「いいじゃんいいじゃん」

ジ「うえーーん！テレちゃんがイジワルになったぁ～」

テ「はいはい、わるーございました！」

ジ「…先週の続いてるの？」

テ「何が？」

ジ「いや、テレちゃんにしてはテンション高いなぁと…」

テ「アハハw…今日のゲスト、誰？」

ジ「今日はぁ…ブツブツ言ってるアルバスくんだよ☆」

ア「えっと、こんにちは～…ブツブツ言ってるって…」

テ「毎回見てると思うけど、この人（ジニー）おかしいから」

ジ「おかしくなんかないやい！」

ア「…おかしいでしょ」

ジ「シクシク……2人とも1回壊れた人だぁ…しかもつい最近ー！」

テ「良かったねぇ」

ジ「よかないわい！」

ア「変な喋りかた～」

ジ「悪い！？」

テ・ア「うん、悪い」

ジ「もうやだーーー！！」

テ「はいはい！えっと、次はですねー…」

ジ「あ、先に始めるな！」

テ「（無視）前書きにあった通り、？でーす？」

ジ「ちょ、無視すんな！」

ア「（無視）準備が長い分、パーティーも長い（つもり）だからな！」

テ・ア「じゃ、また明日～～～！！！」

ジ（マジで無視されたぁ……）

パーティー直前　？（前書き）

短いと思ったら、意外と長く出来たｗ
ま、１０００字越えはしてないけど。

でわ☆

パーティー直前　？

「ちょっと～！この服、なんなの！？」

後ろでボーッとしてた、アイリスがブサクサ言った。

「え、だってクリスマスだろ？」

あっけらかんというジェームズに呆れて言葉が出ないアイリス。

「はあ……もう、いーや。」

そして放棄。

「もう、一生こんな服着ないからな！」

アルバスも言う。

「へえへえ、分かってますよーだ。それより、1人だけメンバーチェックやって欲しいんだけど」

それより、ねぇ？

ま、いっか。

「メンバーチェック？何すんの？」

クライドが不思議そうに聞く。

「ん、ただ来た人に名前と寮聞いて、チェックするだけ。料理運びは、力仕事だからなぁ…女子の誰かがやって欲しいんだけど…」

「あたしはどっちでもいーよぉ？」

ふわぁ～と欠伸をしながらアイリスが言う。

「私も何でもいいわ。テレサは？」

ローズがわたしに振ってきた。

「わたしは…どっちでもいいけど、あんまり力無いよ？」

わたし、本当に力がありません…

それはもう、ビックリするぐらいに。

じゃ、あんまりじゃないのかな？

「それじゃぁ、テレサがそれでいい？」

「いいんじゃない？」

ロウァンが同意する。

「わたしもＯＫだよ！」

「んじゃ決まりだな。…てことで、これよろしく！」

フレッドに2枚の紙を渡された。
そこにはズラーッと名前が並んでる。
うわっ…すっごい！
知り合い多すぎじゃない？
「こ、こんなに来るの！？」
「勿論。じゃなきゃ、こんなに大きいとこにしねーよ」
「そりゃ、そうだね」
ふう…
気を引き締めなきゃなぁ
こんなに来るんだから…
「お。もうすぐ時間だぜ！…テレサは入口のところに。他は奥のほうに下がってて」
ジェームズが指示を出す。
みんなが言われたところに行ったところで、フレッドが叫んだ。
「絶対にふざけるんじゃねーよ？」
「分かってるわよ！フレッドのほうが心配だわ！」

ローズが叫び返す。

「この俺がふざけるとでも……」

「思うに決まってるじゃない！」

「俺に対しての認識ってそんなのなんか？」

「あったりまえでしょ！？」

「ひっでぇ～……」

「んもう、とにかく、絶対ふさけるような真似はしないでね？…ま、キャサリンも居ることだし安心だけど。」

「……おぃ」

なんだかんだで、８時が過ぎた……

パーティー直前　？（後書き）

やっほ～ジニーです☆

今回は、雑談コーナーは無しです＞＜
時間が無い＋母上様がお怒りぎみなものでw

来週はいよいよパーティー！そして後書き雑談のゲストはフレッド君。

あ、もう予告しちゃおうかなぁ

1、『パーティー！　？』
　ゲスト：フレッド・ウィーズリー
2、『パーティー！　？』
　ゲスト：ローズ・ウィーズリー
3、『パーティー！　？』
　ゲスト：ロウァン・クリービー
4、『パーティー！　？』
　ゲスト：アイリス・ライト
5、『クリスマス休暇＜ポッター家＆ウィーズリー家＞』
　ゲスト：リサ・ウッドバーン
6、『クリスマス休暇＜ライト家＞』
　ゲスト：ビクトワール・ウィーズリー
7、『ここはドコ？』
　ゲスト：ドーセット・スリザリン
8、『新聞社設立！？』
　ゲスト：アイリス・ライト
9、『やっと！』

ゲスト：スコーピウス・マルフォイ
10、『クィディッチ　R対S』
ゲスト：ジェームズ・ポッター
10、『ぱーちぃ？』
ゲスト：アルバス・ポッター
11、『ダンスパーティー♪』
ゲスト：クライド・スリザリン
12、『クィディッチ　R対H』
ゲスト：フレッド・ウィーズリー
13、『イースター休暇』
ゲスト：ローズ・ウィーズリー
14、『あれ？なんか…』
ゲスト：ロウァン・クリービー
15、『クィディッチ　G対H』
ゲスト：キャサリン・ハーコート
16、『クィディッチ　S対H』
ゲスト：リサ・ウッドバーン
17、『呪い！？』
ゲスト：ドーセット・スリザリン
18、『謎……～天～』
ゲスト：×
19、『罠　～ドーセット～』
ゲスト：スコーピウス
20、『クィディッチ　G対R』
ゲスト：ジェームズ・ポッター&フレッド・ウィーズリー
21、『優勝は…？』
ゲスト：アルバス・ポッター
22、『夏休み！！』
ゲスト：クライド・スリザリン

あらま、すごいわぁ
これはあくまでも”予定”なので、題名が変わったり?が増えたり、
ゲストが変わったりとすると思いますが、よろです☆

長くなってスミマセン＞＜

あ、少し寒気が…（母の怒りｗ）

でわ♪

パーティー！〝メンバー〟（前書き）

はい、短い？のかな？

でも、いつもよりは短いかなぁ

でわ☆

パーティー！〝メンバー〟

『な、ここで合ってるんか？』

『た、多分・・・』

外からそんな声が聞こえてきた。

あ、来た！

思わず武者震い

ギィーと扉が開いた。

「あ、合ってたぜ！」

「な、ジェームズとフレッドのパーティーってココだろ？」

グリフィンドールの男子４人だ。

「はい！ここで合ってますよ？えっと、名前と寮をお願いします」

そういってニコッと笑う。

営業スマイルってやつです

「あ、ドングレイ・フリフィン、チャールズ・パイパー、ヤット・

ロングマン、ドミニック・スカウト。全員グリフィンドール」

え～っと・・・あったあった！

「ありがとうございます！どうぞ中入ってください」

「お、おう・・・・・・・」

なんか、少し口ごもってるけど・・・大丈夫だよね！

「えっと、ここ・・・だよね？」

「ええ！えええっと、名前と寮をお願いします」

「あ、はい。ケイト・ファーマー、ローレン・ハバード、ロバルド・ピッツリー、スーク・コワノフ、マーク・スコント。レイブンクローよ」

最初に入ってきた女の子が答えた。

「え～・・・・・ありがとうございます！どうぞ～」

「やっほ～♪」

あ、ドーセット！スコーピウス！！

「あれ、早いね～」

「エヘヘ・・・それにしても、テレサかわい～！」

「んもう！わたしたち6人、みんなこんな格好だもん」

「あ、そうなの？見た～い！」

「奥の方に居ると思うよ！・・・えーと、OK！入って！」

「ありやと～！」「さんきゅ！」

「こんばんは～」

「ここでしょ？」

あ、ちょっと気が強そう・・・

「はい、名前と寮お願いします」

「え～っとね。エミリー・ヒリングトン、サーラ・ブレインブリッヂ、レイチャル・コランよ。アンタたちは自分で言ってね」

「あ、OK！えっと、ウィリアム・ファントン、チャート・スリガントン、ジャック・フィーウィット、ザッド・バングリー。みんなハッフルパフだ」

「はい、ありがとうございます！」

それから、どんどんどんどん・・・それはもう、ぞろぞろと来た。

グリフィンドールの同級生も皆来てくれたし、リサも自分の友達たくさん連れてきてくれたんだ！

合計Ｇ＝５９人、Ｒ＝５１人、Ｈ＝３８人、Ｓ＝１４人。

うへ～っいっぱい居るなぁ

どんだけ知り合い居るんでしょうか・・・

パーティー！〝メンバー〟（後書き）

いえ～い☆ジニーですよん♪

～雑談コーナー～

ジ「ちわっす！ジニーです☆」

テ「テレサで～す！」

ジ「昨日はサイコーだったよぉ～！」

テ「へえ」

ジ「あんねあんね～図書委員にゆき（ドーセット♪）となったんだぁ～！」

テ「ふぅん」

ジ「あ、ひどっひどすぎる」

テ「は～い！で、今日のゲストは？」

ジ「・・・・・えっと、今日は悪戯大好き♪フレッドちゃん！」

フ「俺をちゃん付けすんな！」

ジ「いーじゃん別に」

フ「くそっ」

テ「ジニーは自由気ままだからねぇ」

フ「ある意味キャサリンよりこえー」

ジ「ええっ!?キャサリンはめっちゃいい人だよ?ウチの6人組で一番まともだよ!?（テレサ&ドーセット&アイリス&クライド&リサ&キャサリン　この作品のモデルなんですよ～w）」

テ「だって、グリフィンドールでも1番まともだもん」

ジ「確かにそうだね～！」

フ「で、次は?」

ジ「んとねぇなんかパーティー長くなりそうだなぁ1つトラブル起こるし・・・」

テ「へえ～」

フ「な、俺、来た意味あんのか?」

ジ「さあ?しーらない！」

テ「はいはい～！てことでバイバイ！」

ジ「じゃね～」

フ「次俺出るのいつだ?」

パーティー！”食事”（前書き）

いやっほぅ！今日は妹の運動会！

パーティー！”食事”

「全員来た？」

最後の確認でジェームズがリストを覗き込む。

「多分、大丈夫！全員にチェックがついてるはず～」

「んじゃ、始めてＯＫだな！僕たちは一番奥の席で座るからさ。先座っといて。アルたちは料理運び終わったら行くし、僕たちも色々終わったら行くしさ」

「分かった！・・・この紙どうすればいい？」

「あ、貰っとくよ」

「ありがと！」

ジェームズに紙を渡し、奥の席まで走る。

現在は８：３０

それと同時にジェームズとフレッドが壇上に上った。

「レディース　アンド　ジェントルメーン！今日は僕たちのパーティーに来てくださり、ありがとうございます！」

「今からウェイターたちが料理をお運びいたします。」

そう言った途端、５人とキャサリン、ビクトワールが出てきた。

みんなあの服を着ている。

え、演出すごいねぇ

ピューピューとあちこちで口笛が沸く。

７人がそれぞれに運び、また戻っては運び・・・

あー、重そう！こっちでよかった～

あっちこっちで「あの子かわいー！」「写真撮ってもいいのかな？」という女子の声と「な、あっちの子かわいくね？」「俺はあっちの子がタイプだな」という男子のコソコソした声が聞こえる。

「メインの料理はキャサリン・ハーコートとビクトワール・ウィーズリーの手作りでございます！」

「え～！」「すっごい！」「こんなのを！？」

うっそ～！スゴイスゴイ！！

そして、大分食事を運び終わり、７人がこっちに帰ってきた。

「あ～疲れたぁ」

「重かった・・・」

「テレサはいいよな、楽で」

「うん！楽だった☆」

「あ、何それ～自慢！？」

「うん、じま～ん♪」

「え～！！」

「アハハw」

「みなさん？準備はいいですかー？では、グラスを持ち上げて・・・」

壇上の2人が静かに言った。

「「メリークリスマス！！」」

『『『『メリークリスマス！！！！！！！』』』』

ワイワイガヤガヤとみんながご飯を食べたり、雑談したりし始めた。

（みんなには前もって夕食あんまり食べるなって言ってたみたいね）

わたしたちも目の前の食べ物に手を伸ばす。

「あっ・・・美味い！？」

「・・・おぃしぃ～♪」

「これ、2人が作ったんでしょ？」

「すっご～い！！！」

「こんなのよく作れるな・・・」

ホントに美味しい！

みんなからの賞賛もすごい

「そ、そう？」

「良かったわぁ」

はにかみながらありがとう、とお礼を言う2人。

「いっぱい作ったから、雑になっちゃったかな～と思ってたんだけど・・・」

「ええっ！？これで雑！？」

「丁寧に作ったらもっと凄いってこと！？」

「ホントにスゴイよ・・・」

8人で褒めちぎる。

「・・・フレッドに褒められたのはじめてかも」

キャサリンがボソッと言った。

・・・・・・・!?!?

「「「はあ～!?」」」

「フレッド!こんな完璧な人を褒めたこと無いって!・」

「・・・僕も見たことねーや、3年間一緒に居るけど。」

8人でキャサリンとビクトワールを褒めた後、次は7人でフレッドを攻めまくる。

「オレサマは人を褒めるのは嫌いなのだ!!ハッハッハ!!」

・・・・・・・

パーティー！”食事”（後書き）

やっほ～ジニーでぇす！
今日もたのしもー！

～雑談コーナー～

ジ「いえ～す！ジニーちゃん♪」

テ「こんにちは＾＾」

ジ「もーヤ・バ・イ～！」

テ「あ、そうなの？良かったね」

ジ「最近テレサがヒドイ・・・」

テ「アハハハハハｗｗ」

ジ「はい、今日のゲストは・・・クライドと犬猿の仲！？ローズだよ～」

ロ「え！？私とクライド、犬猿の仲なの！？」

テ「初めて知った・・・」

ジ「ま、ロンとハーマイオニーみたいな感じ？」

ロ「は、はあ・・・」

テ「ますます分からない・・・」

ジ「分からなくていーよ！」

ロ「・・・ま、いっか」

ジ「そうそう！諦めちゃえ！」

テ「なんか面倒になったわ」

ロ「だね・・・」

ジ「ほら、・・・が多いよ～」

テ「いや、ジニーがそうしてるんでしょ」

ロ「テレサと同じく」

ジ「勝手にそう言ってな～ウチの頭の中でテレサたちが勝手に動くんだもん！しょうがないじゃん！」

テ「へ、へえ～」

ジ「勝手に手が動くんだもん」

ロ「あ、そ」

ジ「テレサよりヒドイ人がここに・・・＞＜」

テ「ドンマイー（棒）」

ジ「やっぱりヒドイよぅ」

ロ「へえ～で、次は？」

テ「パーティーのお菓子ｖｅｒのはず！」

ロ「ドーセットが興奮しちゃうヤツね」

ジ「・・・次回もよろしく」

テ「またね！」

ロ「次はいつ会えるかな～？」

パーティー！”お菓子”（前書き）

なんか非日常ばっかりだけど、これもう12月ですからね？
書いてないとこはふつーなんだよ？思いっきり日常だよ？

パーティー！”お菓子”

そして、３０分経ちました。

大分、みんな食べ終わった感じかな？

頃合を見て、ジェームズがマイクを持つ。

「今からお菓子のバイキング、始めま～す！勝手に取っていってください！」

ものすんごく適当に話すジェームズ。

「あ、量はめちゃくちゃあるから、どんだけ取ってもいいぜ！」

そしてフレッドが付け加え。

１・２年生くらいの生徒たちがキャイキャイ言いながら走ってくる。

お菓子、こっちにあるんだよね・・・

「キャ～～～！！お菓子がいっぱいあるぅ～～～♪」

ドーセットの叫ぶ声が聞こえてきた。

「ね、スコーピウス！！蛙チョコレート食べない？あ、百味ビーンズも！！いやっゴキブリゴソゴソ豆板もあるの！？あ～！ペロペロ

酸飴も～！！！コレは、レモンキャンディー？あ、新製品の蛙の卵チョコレートじゃない！？ビスケットもあるのぉ～！！！スナック菓子もあるんだ！！え～っとコレは・・・？ポ・テ・ト・チッ・プ・ス？なんか美味しそぉ～～う！！！キャ～～～～～！いっぱいあるぅ～～～～～♪♪」

大量のお菓子を目の前にし、目がハートになっているドーセット。

流石のスコーピウスも苦笑いしている。

そしてクライドは顔に縦線を入れ、頭を抱えている。

ハ、ハ、ハ・・・・・・

ある意味スゴイよね、ドーセットって

「ここ、置いてもいーい？」

ドーセットがお菓子をたっくさん抱えてきた。

「別にいいけど」

「ありがと！・・・・・・重かったぁ」

そりゃ、そうでしょうね

「蛙チョコレト♪何のカード入ってるかなぁ」

ニコニコしながらドーセットが言う。

「こんなに食べられるのか？」

スコーピウスが心底不思議そうに聞く。

「これっくらい軽いわぁ～～～！！・・・・・・・・・・・え～っと・・・ゲッ、ヴォルデモートだったぁ・・・・」

口を尖らせるドーセット。

そう言いながらもチョコはパクパク食べている。

「え～っと次は？・・・・・・・・・・・・・・・また、ヴォルデモート！？」

「次こそ！・・・・・・・・・・・・・・・またぁ？」

「今度は！！・・・・・・・・・・・・・・・またですかぁ！？」

「もう来ないはずだわ・・・・・・え～！！！」

「こうなってくるとっ・・・・・・・・・ううっまただわ・・・・・・」

「・・・・・・・最後こそ！・・・・・・・・・・・・・・・え～！！私、呪われてるの！？」

結局全部、ヴォルデモートが出てきたドーセット。

今、床で沈み込んでいます。

ス：「あ、僕リーマス・ルーピンだ」

キ：「私、シリウス・ブラックだって～」

ジ：「僕は・・・同じ名前のジェームズ・ポッターだ！」

アイ：「あたしリリー・ポッターだぁ！」

フ：「俺は・・・ダンブルドアだぜ！」

ビ：「わたし、ハーマイオニー叔母さんだ！」

ロ：「あ、私のお父さん！」

ア：「僕も父さんだぜ！」

ロウ：「セブルス・スネイプだって～！」

テ：「わたし、キングズリー・シャックボルト！今の魔法大臣だっけ？」

ク：「お、レギュラス・ブラックだ」

「・・・・・・・・・・・・・・私は悪に好かれてるんだわ」

わたしたち（ドーセット以外）は1つしか開けていないのに、思い思いのカードを貰っているのを見て、ますます落ち込むドーセット。

「・・・・・・・・・・・・ドンマイ」

全員が労わるような目でドーセットを見る。

ペタンと座り込み、さめざめと泣くドーｓ・・・！？

「あ～～～～！！！！！！！！！！！！そーだったぁぁぁ！！！！！！！！」

いきなり叫ぶドーセット。

『『『『『！？！？！？！？！？！？！？』』』』』

皆の目が点になる。

「アイリス！ちょっと来て～♪」

さっきとは打って変わり、ニッコニコの笑顔で強引に連れて（連行して）行く。

「今日のあたし、２回も連行されてる・・」

ため息をつくアイリス。

「あのねあのねぇ～・・・・・・・・・」

ドーセットがコソコソとアイリスの耳に耳打ちする。

ついさっきの沈みようはドコ行ったの？

「・・・・・・・しん・・・・・・やら・・・・・い？」

「え・・・・・な・・・・・の？」

「・・・・に・・・・・・・・・て・・・・・・・・る・・・・」

「へ・・・・・・・ど・・・・・・・・・こ・・・・・・く・・・？」

「・・・・・・・い・・・な・・・・・わ・・・・ニュ・・・・」

2人のコソコソタイム。

すこーし聞こえるけど何言ってるのかは全然分からない。

どんどんアイリスの目が輝き始める。

「やる！やるに決まってるじゃん！！」

「でしょでしょ～♪・・・休暇終わったら始めるからネ～！」

「OK！楽しみ～」

アイリスまで興奮状態。

『『『『『？？？？？？？？？？？』』』』』

みんなの頭上にハテナマークが浮かぶ。

「何？なんかあるの？」

「ひみつ～！」

「お～しえないっ♪」

ニヤニヤしながら返す２人。

「何だよ・・・てか、２人とも興奮度ＭＡＸだな」

「「エヘヘ～☆★」」

『『『『『『『・・・・・・・・・・・・・・・・・・』』』』』』』

パーティー！”お菓子”（後書き）

いえ～い！ジニーですよん♪
ゴロゴロしまくりの1日でしたーw

～雑談コーナー～

ジ「いやっほ～～ぅ！」

テ「こんにちはぁ～」

ジ「お菓子いーなぁ・・・無料（ただ）で貰えるとか・・・！」

テ「いーでしょ！」

ジ「いいよねぇ・・・・」

テ「ｗｗｗ今日のゲストは誰？」

ジ「きょーはねぇ・・・なんとなく影が薄いロウァン君！」

ロ「か、影が薄い！？」

テ「・・・・・・・・・・？？？？」

ジ「だって、中々台詞（セリフ）でないじゃん」

ロ「アンタがやってるんでしょーが！！」

ジ「ハイ！今の言葉、関西弁にしてくーださい！」

ロ「・・・・・・・・・はぃ？」

テ「・・・・・・・・・ほぃ？」

ジ「テレちゃんなら出来るっしょ～！」

テ「・・・よくわからないよぅ」

ジ「んもう！愛知県に居たのに出来ないのぉ～！？ウチなんて生粋の東京人なにに・・・”アンタがやっとるんじゃろーが！ボケェ！！”だよ♪」

ロ「・・・何？今の言葉、変だね」

テ「・・・ボケェは要るの？」

ジ「変じゃないもん！そして、要るもん！！」

ロ「・・・へえ・・・」

テ「あ、そ」

ジ「最近ホーントテレちゃんが悪になってるよぅ」

ロ「いや、ここだけだね」

テ「そだよ！ここだけでだよん！！」

ジ「ううっ・・・ひどぃ」

ロ「ｗｗｗアハハ！本当にテレサがオカしくなってるなぁ」

ジ「わ、笑わんといてぇ！」

テ「どーぞどーぞ笑っちゃって～」

ロ「・・・・・・なんか言うこと反対じゃないの？」

テ「いーのいーの！！・・・あ、もう時間だね～」

ロ「ん？あ、ホントだ」

テ「てことで、じゃあね～！」

ロ「さよーなら～！」

ジ「ば、ば～い！」

パーティー！”ゲーム”　～ローズ～

「な、何があるのか知らねーけど・・・大分皆暇を持て余してきたみたいだしなぁ・・・最後の行くか？」

「おうっ！」

ニヤッと返事をしたフレッド。

マイクを持ち、叫んだ。

「盛り上がってる皆さん？最後にゲームだ！！」

『『『『『『いえ～～～～～～～～～～～～い！！！！！！！！』』』』』』

みんなのテンションは最高潮に達している。

「賞品はＷＷＷの新製品！まだ未発売のやつだぜ」

ええっ！？そんなのいいわけ！？

・・・ジョージ伯父さんはＯＫしたのかしら？

「え～！うっそぉ！！」「スゲエ！」「欲しー♪」

悪戯好きの生徒（ま、大体グリフィンドールなんだけどね）がやる

気満々に。

「また、お菓子セットでもＯＫデス！」

その言葉でほとんどの生徒の顔が輝いた。

そ、それはどっから来たわけ？

「何？何のゲームするんだ？」

クライドが聞いた。

「・・・なんでもいーぜ！全く決めてないからなぁ」

・・・・・決めてなかったんかぃ！！

ここに居る全員がザワザワと話し始める。

「アレはどう？えっと、ドッヂボール！！」

テレサが指を１本立てて言う。

「え？にゃにしょれ？」

まだお菓子を食べているドーセットが不思議そうに聞いた。

「え、知らないの！？」

驚愕した表情のテレサ。

・・・私も知らないわ

テレサ以外の9人が不思議そうに顔を見合わせる。

「ええ～！何で！？嘘でしょ・・・」

しょぼんと肩を落とすテレサ。

「もしかしてマグルの遊びじゃないか？それ」

「テレサ、マグル育ちだもんね」

「・・・魔法界じゃやらないんだね・・・楽しいのになぁ」

「本当に何すりゃいいんだ？」

「ローズと似て、フレッドもおっちょこちょいなんだな」

クライドがボソッと言った。

！？！？

「ちょっと！今、サラッと私がおっちょこちょいって言わなかった！？」

「だって、そうじゃんか」

「ひどっ！？フレッド程じゃないわ！」

「いや、ローズのほうがひどいと思うけど」

「何、それ！サイッテー！！」

何よ何よ何よ～！！サイアクサイテー！！！！

「おいおい！勝手に喧嘩するなよな～」

ジェームズが苦笑しながら止めてきた。

・・・・・・・・・！？

「「ゴメン・・・」」

ヤバ・・・こんなとこでやっちゃまずいよね

「・・・初心に戻ってかくれんぼじゃダメかな」

ロウァンが小さめの声で言った。

”かくれんぼ”！？

さ、流石にそれは・・・ね？

「いいじゃねーか、それ！」

「それで決まりだ！！」

・・いいの！？

「え、あ、へっ！？」

当の本人も驚いている。

「あ～皆さん？”かくれんぼ”に決定致しました～！」

『『『か、かくれんぼ！？』』』

そりゃ、ビックリするわよねぇ

「でも、出来るのかしら？かくれんぼやるには狭くない？」

あ、そーいやそうよね

広いっちゃ広いけど・・・こんだけ人いるんだから、もっと広くなきゃね

こ～～んなに居るんだよ？（１６２人！？）

「それなら大丈夫だぜ！・・・なんたってさ」

フレッドがそう言った途端・・・

テーブルが消え、壇上が消え、周りの壁も消え・・・・・

「ひゃっ！？」

誰かが声を上げる。

そして・・・さっきとは比べ物にならないくらい大っきくて、色々

なものが散乱している部屋になる。

「うわぉ・・・」

みんなして、ポカーンとする。

やった本人も驚いている。

「スゲェなぁ・・・」

「何が起こったのかすら分からなかったよ!?」

みんなが口々に言う。

「ん～、いいトコだぜ!早速始めるかぁ～」

ジェームズがパンパンと手を叩き、言った。

『『『おおぉ～～～!!!!!』』』

ノリ、いいわねぇ・・・真似できないわ

「そーだなぁ・・・人数多いから、５年生以上が鬼でいいか?」

「いいんじゃない?流石に5年生以上が隠れるほうだと・・・さ」

「んじゃ、それでＯＫですか?今から5分間で1～4年生が隠れるから、その後・・・そうだなぁ・・・３０分、で探す!透明マントなどの道具を使うのは禁止!・・・てことで、よーいスタート!!」

い、いきなり！？

1～4年生が慌てて四方八方に散る。

えっと、5分ね・・・とにかく奥の方に行こうかな

パーティー！”ゲーム”　～ローズ～（後書き）

いやっほ～ジニーです♪
疲れた・・・＞＜

～雑談コーナー～

ジ「やっほ～」

テ「こんにちはぁ！」

ジ「あーあ、疲れたなぁ」

テ「へえ～」

ジ「テレちゃんは疲れたこと無いの？」

テ「あるに決まってるじゃない」

ジ「ふぅん」

テ「今日のゲストは？」

ジ「んとねぇ・・・よく壊れてるアイリスだよ～」

ア「よ、よく壊れてる・・・ねぇ・・・確かにそうだけどさ！他に紹介の仕方無いの！？」

テ「・・・この人にそんなこと言っても無駄だよ・・・」

ア「・・・そだね・・・」

ジ「そんなこと無いもん！ウチとアイリスは同一人物だもん！」

テ「へ？」

ア「あ？」

ジ「だってさぁ！ウチのあだ名がジニーなわけ。んでウチがモデルのキャラがアイリスなの！！」

ア「あ、あたしこんなじゃないもん！（泣）」

テ「アイリスはこんなのじゃないよ？」

ジ「こ、こんなの・・・！？ひどいっ酷すぎるよッ！？」

テ「わたしはモデル居るの？」

ジ「居るよ～ロンってあだ名の子だよぅ」

ア「へえ～他にも居るの？」

ジ「うん・・・ハリーって子がドーセットで、ドビーって子がクライドで、ハーミー（ハーマイオニー）って子がキャサリン。あと、まだ出てきてないけどビーキー（バックビーク）って子がカレンで、あとリサも居るよ～」

テ「へえ！」

ア「他の子は良さそうな人だね～」

テ「うんうん！」

ジ「何で分かるの！？あだ名言っただけじゃん！ジニー（・ウィーズリー）っていい人だよ！？」

テ「それは知ってる。」

ア「ジニー（アルたちのお母さん）はいい人だけど、ジニー（作者）は悪い人。」

ジ「断言するなぁ～！」

テ「いいじゃん！・・あ、じゃーねぇ！！」

ア「バイバーイ！」

ジ「か、勝手に終わらせるの！？」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3345w/

輝く花

2011年10月11日13時00分発行